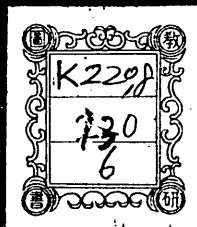


訂改
中等新國文
卷六

360



K220.8

130

6



河
又
一
七

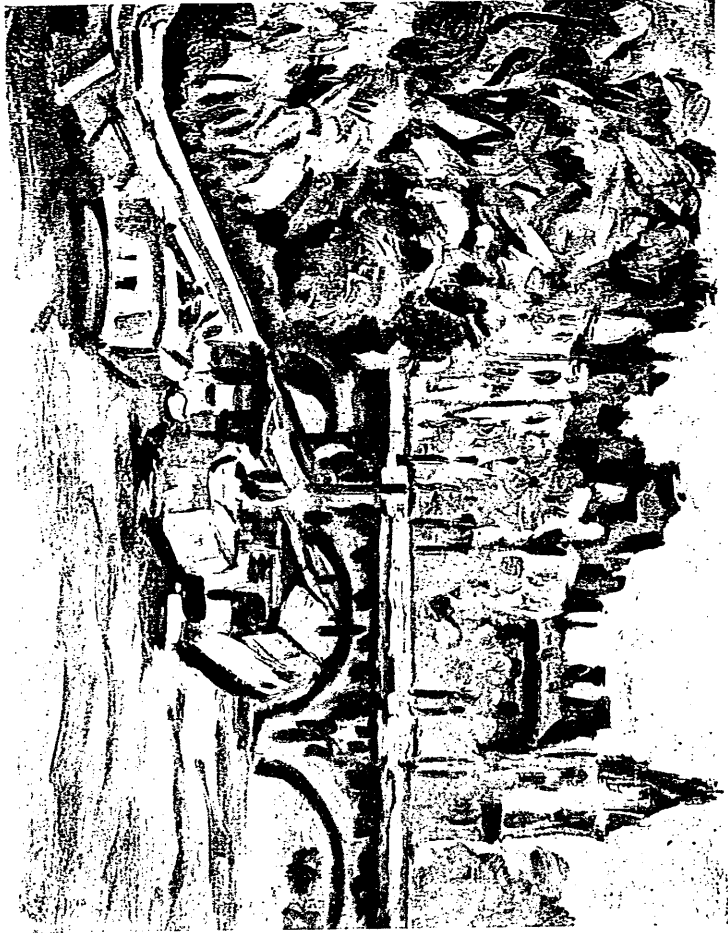
東京帝國大學教授 藤村作
文學博士 島津久基
共編



國文

東京 玉文堂





訂改 中等新國文

東京 至文堂

東京帝國大學教授 藤村作
文學博士 島津久基 共編

訂改 中等新國文 卷六

目次

一	自然と我が國民性……………	藤岡作太郎……………
二	東西相觸れて……………	新渡戸稻造……………
三	空行く雁……………	曾我物語……………
四	曾我兄弟……………	森鷗外……………
五	かはほり(近世短歌)……………	諸家……………
六	短歌評釋……………	齋藤茂吉……………
七	箱根路……………	正岡子規……………
八	消息二篇……………	高山林次郎……………
九	松江の朝……………	小泉八雲……………

一〇 行く秋の星……………	野尻抱影…二
一一 狂言……………	大佛次郎…充
一二 如意輪堂……………	(太)平記…六
一三 新月……………	北原白秋…七
一四 郷土の魅力……………	相馬御風…六
一五 冬來たる……………	貝原益軒・中島廣足…七
一六 浮島が原の對面……………	(義)經記…一〇
一七 狂歌と川柳……………	藤村作…一七
一八 御慶狂歌と川柳……………	(諸)家…一〇
一九 雪前雪後……………	幸田露伴…二三
二〇 智恵は小出しにすべし……………	福澤諭吉…二八
二一 自然と色彩……………	松本亦太郎…三〇
二二 建國の精神……………	永田秀次郎…三九

二三 鎮西八郎爲朝……………	(保)元物語…三四
二四 世界の歌枕……………	上田敏…三九
二五 讀書の選擇……………	佐々醒雪…四
二六 徒然草抄……………	吉田兼好…五
二七 千曲川旅情の歌……………	島崎藤村…五
二八 文學と氣品……………	芳賀矢一…六

目次終

改訂中等新國文 卷六

藤岡作太郎

國文學者

文學博士

東京帝國大學助

教授

石川縣金澤市の

人

明治四十三年歿

年四十一

一 自然と我が國民性

藤岡作太郎

國民の特性は、初よりその人種に固有なるものもありと雖も、またその住處の地勢氣候によつて馴致せられ、變化したるものも少からず。そのものと同じき印度歐羅巴種族が、東洋に西洋に相分れて、寛猛柔剛、匹を異にする種々の國民と成りたるは、南國の日北地の風、山海さまぐの風物がこれを養ひたるなり。日本國民が全一體としてよく統合せるも、また蒼々たる煙波の外、四圍接するの國なき、その地位に影響せられしこと少からざる

べし。

日本は東洋の樂園と稱せらるゝこと、歐洲に於ける伊太利瑞西の如し。氣候中和にして、山水明媚、瘴烟毒霧の襲ふことなく、猛獸毒蛇も棲むこと稀に、曠茫たる平原、眼界の盡きざるものなく、浩蕩たる長流、百里の山野を浸すを見ず、雄大瑰偉なる大陸的風致に乏しと雖も、到るところ優麗嫺雅なる勝景に接す。東海の岸を縫うて進めば、富士を前にし、富士を後ろにして、長汀曲浦、浪靜かに砂滑かなり。瀬戸内海に船を行れば、松の島を迎へ、巖の嶼を送りて、朝日夕日に移ろふ景趣は、應接に暇あらず。陽春櫻あり、晚秋菊あり。初夏の梢にかゝれる藤波は、紫の綾を池水の鯉に織出し、季冬の森



藤岡作太郎

暢の聲暗き蔭に、紅の椿は拾ふ兒なしに切りに落つ。美なるかな山河、これに接するものは、怒れる心も和ぎ、結べる思も解けて、愛賞に他事なきを得ず。山川は優美なり、穩和なり。これに馴れ、これを愛する國民が、また、優美にして穩和なる特性を有するに至れるは、即ち自然の感化の致すところなるべし。日本の土地は孔雀を生ぜずして、雉子を産す。國民の性もまた孔雀の姿の如く濃艶ならずして、雉子の如く淡泊なり。悲憤の情時には火の如く燃ゆることありと雖も、概するに稟質猛烈ならずして、穩健に執着



瀬戸内海ノ浦

せずして洒脱なるも、また外圍の風物が漸次に養ひ來れるものならんか。

慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯その恩愛を忘れず、日本の風土は國民の慈母なり。地味豐饒にして河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美溫和なる山川は常に臉上に愛を湛ふるが如し。接するものはこれに親しみ、親しむものはこれを慕ふ。愛に迎へらるゝものは愛に酬いざるを得ず。天然の大公園に棲む我が國民が、その一木一草をなつかしむは自然の情なるべし。都會の綠日に張りたる夜店には、食品も玩具も數ふるに足らず、露を帯びたる植木の葉の翠花の紅こそ、カンテラの光に映えて、水々しく鮮やかなるを、中流以下の市民はあれこれと買求めて、座敷に飾り、庭に植込む。裏長屋の道具の据ゑ所もなき窓前にも、稗詩を作りて、田舎の景色の面

カンテラ

Candelaar
(オランダ語)

影を偲び、破れ鉢に唐の芋を育てて、やさしき野趣を嬉しむ。長火鉢のわきの福壽草は鏡餅に對して暖げに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し。上下貴賤を通じて、自然を愛するこ

と此の如きは、他の國民にその匹ありや。

我が國民は母の慈愛をのみ享けて、父の威嚴を知らず。自然の愛すべきを見て、恐るべきを思はず。野をも垣をも吹亂す二百十日の風も、野分の名に優しく、蜂をも谷をも一つに埋みて、さまざまの山里も、深雪といへばみやびやかなり。荒き猪も臥猪の床と稱ふるにやさしく、聞ゆなど兼好がいへるは我等の自然に對する態度を説明せるなり。雨といへば照續きたる夏などは嬉しけれど、一日の降りも十日の照りより飽きくするに卵の花くたし、時雨など、何れも趣ありて感ぜらる。自然の愛はかくして表はるゝのみならず、その名を借りて屢、人事に用ふ

荒き猪も

あやしのしづ山
がつしのわざも
いひいづれば面
白くおそろしき
るのしゝもふす
るの床といへば
やさしくなりぬ
(徒然草)

兼好

俗名吉田兼好
鎌倉室町時代文
學者

正平五年(三三〇)

寂
年六十九

ることあり。文學には、源氏物語の卷の名に、夕顔・末摘花・葵・椿・朝顔・胡蝶・螢・常夏・藤・袴・若菜・柏木・鈴蟲・紅梅等の類多く、これより源氏名の稱は起れり。我等はまた日常の用品にも、自然より出でたる名を用ふ。菓子に鶯餅・櫻餅・柏餅・萩の餅・紅梅焼・時雨など枚舉するに遑あらず。今の煙草にも、福壽草・白梅・阜月・あやめ・萩・紅葉等あり。古くは獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるもやさしからずや。斯くの如き類は指を屈するに随つて想ひ出づべく、いづれも國民が自然を昵愛することを示すものならざるなし。

我が國民は自然を愛賞する餘り、又よくこれを尊重せり。尊重するものには悦んで服従す。彼等は漫りに人工の手を加へずして、自然のまゝに自然を仰ぐ。この服従を以て屈伏といふ勿れ。悦服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈服するものは

不平なる奴婢が氣儘なる主人に對するが如く、悦服するものは從順なる兒孫が寛仁なる家長を見るが如し。任意的なるものは毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意となす。花を愛する趣味の、我等がいかに西洋人に異なるかを見よ。薔薇は、枝ながら幹ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の艶に、香の芳しきなり。櫻は、一枝の趣を愛するよりも、峰に亘り川に沿ひて、雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もそのまゝに、願はくはこれに置ける朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて歡興を助くるに、一は床上の盆石・盆栽に、自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨繪との異なるが如し。同じ菊を見るに

チウリップ

Tulip

ヒアシンス

Hyacinth

も、彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋草花のチウリップ・ヒアシンスなど、その葉に何の趣もなくして、その花の妖艶なるは、寧ろ我等の眼には毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花尾花、その花に何の美はしきことかある。されど、あるかなきかの黄花を捧げて、なほたよくと下蔭の蟲の音にもゆらぐさま、ますほの色はやがて白くほゞけて、霧に濡れ風に靡く趣は、我等が胸に浸みて忘れられず。日本人が花を愛するは、その外形にあらず、賦色にあらずして、その眞意義を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を



秋草

尊ぶなれ。自然に親しむことの深きは、これ我が國民の特性なり。
(國文學史講話)

二 東西相觸れて

新渡戸 稻造

新渡戸稻造
農法學博士
貴族院議員
元國際聯盟事務
次長
盛岡市の人
昭和八年歿
年七十二
キップリング
Rudyard Kipling
(1865—1935)
英國の詩人、
小説家
グリーニッチ
Greenwich
テームス河
昨の河港

或は東或は西と云へば、如何にも兩者の間に懸隔があるやうに聞える。文章家は、この文字を用ひて、相容れざる差を示す。誰人も知る彼のキップリングの、東は東、西は西、兩者永遠に相逢ふことなし。の一句を聞けば、東西は全然反對の位地にあるものの如く聞えるけれども、抑、東西を別つ標準は何にあるかと質せば、これ實に獨斷的のものにして、各自の立つてゐるその場所を以て基點とする位なものである。地理學者が東西を論ずる時、何處を起算點とするか、決して未だ一定してはゐない。たゞ普通には倫敦の近郊グリーニッチを以て起算點とするが、それは

この村に天然に起算點とすべき物が備つてゐるためでもなく、天啓によつて之を定めたわけでもない。偶、此所に相當完備した天文臺があつたからなので、他の國人は決してこの地を擇んだ事を喜んでゐるのではない。東西なる語は單に相對語であつて之を測る標準さへも確定してゐないから、況して東邦とか、西國とか云ふが如き、區域を指すには餘りに茫漠の言葉である。



新渡戸稲造

中古時代、トルコ人が勢威を振ふに及び、小アジアに一大城壁を築いて、西から東に來るものを禁じ、又東から西に來るものを止め、鎖國的の政策を行つて東西の關係を阻隔したために、文化

アレクサンダー
(前356-323)
古代ギリシ
ヤの英雄

的交通は行はれず、往時アレクサンダー大帝が切角苦心した東西結びつけの計畫も、全く破壊されて了つた。その以後、西洋は西洋、東洋は東洋で、各、獨立の文化を營み、大體に於て人類一般の進歩に貢獻したことも少くはないが、他の方面に於ては、之が爲に各、圓滿な發達が阻止されることになつた。それは丁度我が國の鎖國制度の下で、我が固有の文化が獎勵されたとは言ひながら、我が民族の精神的に壓迫された結果の面白くなかつたのと同じである。人間が廣い世界の空氣を吸つて大きくなることが出來ず、又、大志大望あるものが世界を相手に競争の出來なかつたことなどを思へば、或小さな繊細な技藝に於ては發達したとしても、差引勘定して利害は果してどうであらう。それと同じく東西の交通の切斷された爲に、東も西も共に少からぬ損害を蒙つて、片輪になつたのではなからうか。

圓満な地球には、元來東も西もなかつたのであるが前に述べたトルコ人の障害物によつて二つに割られ、こゝに始めて東と西とに分立し、互に敵視してゐたが、爾來星霜幾變遷するに従ひ、自分個人のみにては完全ならざる事を悟り、近來眞面目に人生を考ふるものは西洋人で東洋に憧れ、東洋人で西洋を慕ふ者が多く出て來た。この傾向の人は今猶小數に止るけれども、而も其の主義學說藝術政策等によつて、東西の益、近づくものであることは信じてよい。そしてこれが實現の任に當る人は未來の世界の構造者であり、先驅者である。

近頃何人も口ずさむキップリングの「東は東西は西、此の兩者は永遠に相逢ふことなし」の詩句が不幸にして各國に擴つてゐるが、同じ詩の次の句に「されど、二人の強者相直面して立つ時、兩者の間、東西も、國境も、種族も、系統もある事なし、よし彼等は世界

の端と端より來るとも」とあるのを見落してはならない。こゝだ、二人の強き個人が互に直面し、互の心を打明けて相接する時は、兩者は純然たる人間として交はるのであるから、その間に何の蟠もなく、相手が外國人なるか自國人なるかの差別までも消え失せるのである。卓越した人が相逢ふ時は、國籍や人種の如何に拘らず、又碌々言語が通じなくとも、一見舊知の如く愉快に會見の出來ることは、我々の多く目撃することである。畢竟、これは人間としての性質を遠慮なく發露するからである。キップリングのこの詩句は大いに味ふべき所がある。その根柢の思想は、東西の別は風俗習慣或は思想に於て大差を見るが境遇に捉はれない進んだものの中には共通點があつて、しばらく風俗習慣或は民俗を支配する思想から脱するならば、西人東人互に共鳴する所が多くあるといふのである。

國民外交の基礎となるのも即ちこれで、かくの如き心掛の個人が多くなればなるほど、東西の親睦の強度が加る。東西の融合を圖るに當つては、國家の斡旋も無論缺くべからざる條件ではあるが、これは寧ろ形式上のことであつて、眞にこの目的を遂行するには、高い人道の立場に立つて精神的にこれが實現を期さなければならぬ。個人としても國民としても、他國に對して徒らな敵愾心や猜疑心を逞しうすることなく、美しい國際精神の發露を妨ぐることなく、常に善意と友情とによつて、碧空一片の雲影をも止めないことが必要である。

(東西相觸れて)

三 空行く雁

頃は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年、あらたまの年立歸りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮箱王は母

一萬
曾我十郎祐成の
幼名
箱王
曾我五郎時致の
幼名

父

河津祐泰、祐親
の子
安元二年(公義)
工藤祐經の部下
に殺された

母

名滿江、祐泰の
死後曾我祐信に
再婚した

曾我殿

太郎祐信

工藤一萌

祐經

鎌倉殿

源賴朝

此の里

神奈川縣足柄下
郡曾我中村

の膝の上に戯れながら、いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。其の佛は何國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせたまへ。といひければ、遙かに忘れたる空も今更思ひ出されて、消えいるばかりなり。母泣くく、のたまひけるは、あの曾我殿こそ己等が父にてあれ。と心強く語られけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、父御前は、まことやらん。狩場より歸りたまふ道にて、工藤一萌とやらんに射られて死にたまひぬ。と兄御前は語らせたまふぞや。當時鎌倉殿の切りものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等が此の里にあるを知らてや過ぐらん。など大人しく語れば、母より始めて女房たちまで皆袖をぞ絞りける。かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、

河津殿
河津三郎祐泰
工藤祐經の臣下
にうたれた

兄弟二人庭に出て遊びけるに、五つ連れたるかりがねの南を
さして飛びゆくを見て、一萬申しけるは、あれ見給へ、箱王殿、空
に飛ぶ翼も別の翼ぞ交へぬ。五つあ
るは、一つは父、一つは母、三つは子ども
にぞあるらん。物言はぬ鳥類だにか
くの如し。我等人倫に生れながら、和
殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾
我殿は實の父にてましまさぬこそ悲
しけれ。我等が父をば河津殿と申し
てありきとかや。父だにも世におは
しまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持
ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者も馬
鞍弓矢を以て物を射ありく事の羨ましさよ。これらの事ども



雁く行空

遠侍「トホザム
ラヒ」
古昔武士の家で
主殿から遠くは
なれて、中門の
際などに設けた
番所

思ひ續くれば、いつよりも今宵は父御前の戀しく思ひ參らせら
るゝぞや。とて、袖に顔を差入れてさめく、と泣きければ、弟も小
賢しく顔をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房之を聞き
て、あなあさまし、人もこそきけ。いかに和上藤たち、夜も更けぬ
るに、さやうにはおはするぞ。とくく入らせ給へ。と恐れしげに
いひければ、二人の者は門外に逃げいでて、思ふやうに飽くまで
泣きて、後に内に入りけり。

其の後は、二人の者ども、我が身のほどを知りぬれば、世になき
父を慕ひつゝ、語りあはするまではなけれども、たゞ目ばかりを
見合はせて、互に袖をぞ濡しける。未だ十歳にも満たざるに、あ
はれは深く、思ひ知りけり。或時兄弟は竹の小弓、薄刃の小矢を
取添へて、遠侍に出て遊びけるが、明障子のありけるに、二人立
向かひ、あなたこなたに射通して、一萬箱王に申しけるは、我等も

いつか成長して、和殿は十三、我は十五にだにもならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く刺合ひ、射取りて後にはともかくもなりなん。和殿も弓をよく射習ひたまへ、我も習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ、といひければ、弟も打領きけり。年ばへには恐しきことかなと人々思ひけり。

(曾我物語)

四 曾我兄弟

森 鷗 外

森鷗外

名は林太郎

醫學者

文學者

醫學博士

陸軍々醫總監

帝室博物館館長

大正十一年及

年六十一

幕の外

十郎五郎登場。續松を把る。

十郎 見て置いた、これは假屋ぢや。油斷いたすな。

五郎 心得てござる。

十郎 こりや、五郎。父上がお討たれなされてから、十七年の久し

西王母

漢の武帝の頃の
仙女の名

金輪王

須彌山の四洲を
統治する王

い間、我々二人が念頭を、離れぬ遺恨を霽すは今ぢや。

西王母が園の桃は

三千年に只一度

花を開くと傳へ聞く。



森 鷗 外

五郎 又、金輪王の出づる時、

現るといふ優曇華も、

稀に逢ふ日の譬なり。

十郎 待ちに待った當の敵、左衛

門尉は言ふに及ばず、出逢

ふものに容赦はいらぬ。

ぢやが、女ばらも許多ある。逸つて無益の殺生すな。

五郎 仰やるまでもござらぬ。

十郎 いざ。

五郎 いざ。

（二人幕を褰げて入る）

板戸をさしたる假屋の縁の前。

十郎五郎登場。

五郎 兄上、敵はどこへ参つたてござらう。

十郎（左手を顧みる）晝酒飲うてをつたのは、今の假屋ぢや。それにあの通人影も無い。彼奴我等が寄せると悟つて、急に臥戸を換へたと見える。はてどこを尋ねたものでござらう。

五郎 此の上は是非がない。假屋々々を片端より搜すまでぢや。

十郎 待て。大切の場ぢや。

（假屋の板戸を開き、龜鶴燭を乗りて登場）

龜鶴 波に漂ふ沖津舟

しるべの山はこなたぞや。

十郎 さては龜鶴がしるべいたすか。五郎 続け。いざ。

五郎 いざ。

（龜鶴入る。十郎五郎續き入る。夜廻の卒二人、一人は右手より、

一人は左手より登場）

の第一 や。これはお役目御苦勞ぢやの。

の第二 お互ぢや。（板戸の方を見る）こゝはどなたやらの假屋ぢやつたの。

の第一 此、か。不斷はお屋形の宿直の人達が、代り合うてさがつて息まつしやる處ぢやが、今夜は工藤殿が客人と一しよに這入られた。

宮司

備中吉備津宮々
司大藤内

の第二 客人といふのは、あの象のやうに太つた宮司殿か。

の第一 さうぢや。あゝ、又降つて來た。どりや、一廻してしまはう

か。

第二の卒 そんなら又後に逢ふぞよ。

(卒二人入違ひて退場。大藤内板戸を蹴放ちて登場。十郎・五郎・結きて登場)

大藤内お主達は曾我の同胞ぢやな。工藤殿を殺した下手人はわしが見極めた。後日に異論を言ふまいぞ。

十郎 何を。

(十郎・大藤内を一刀切る。大藤内俯臥になる。五郎腰を切放す。)

五郎 馬は吼え

牛は嘶く

世なればや

足二つもて

四つに這ふらん。

妹尾
太郎兼康
平家の士

十郎 (笑ふ)こやつ、平家の世盛には、妹尾に附いて榮をもとめ、その罰に召放された領地を、又工藤の手で取返しをつた。世渡上手奴。四這ひに這うて世を渡れ。

(十郎・五郎共に笑ふ。)

もうこれまでぢや。潔く名告つて討死せう。

五郎 さうぢや。兄上、いしくも言はれた。

十郎 やあ、假屋の人々。

かねて音にも聞きつらん。

目のあたりには今し見よ。

伊豆の國人河津の次郎祐親には孫、三郎祐泰がわすれがたみ、養家の氏を冒して曾我の十郎祐成。

五郎 同じく五郎時致、只今假屋の内に於て、父の敵工藤左衛門祐經を討取つたり。

十郎 我と思はん人々は、
疾うくここにいで合ひて

二人 御討留め候へ

(二人暫く屏息して物音を聞く)

五郎 誰も出ぬてはござらぬか。

十郎 無下のものぢや。さらば馳廻つて名告らう。五郎まるれ。

將軍家の屋形。葎の外、板縁。雨。五郎登場。

五郎 兄上。兄上。

仁田（舞臺の背後にて）やあ、假屋の人々承れ。狼藉者の一人祐成

は、伊豆の國人仁田四郎忠常が討取つたり。

閑（同上）えい、おう。

五郎 はつ。兄上はお討たれなされたか。此の上は祖父様を自

滅させ、敵工藤を最頂せられた將軍家を一太刀恨まう。さ
うぢや。

(五郎縁に登る。五郎丸帽衣（丸帽衣）を被り、すれ違ひ、帽衣を脱ぎ、背後より五郎を抱く。五郎板縁をふみ抜く。二人無言にて揉合ふ。幕)

將軍家の屋形。垂簾。簾の下には諸大名左右二列に坐す。中

央前景に狩野介宗茂新開荒二郎忠氏がゐる。

第一名の最早辰の刻になつてござる。犯人を預つた大見の小平太
はどういたいたやら。(第二の大名に) 固より曾我の殿原は、
奸盜・山賊の類でもござらぬに、笑止にも繩附になり申した。
第二の情ない儀でござる。よしや御假屋を汚したとて、討つた工
藤は父の仇ゆゑ、申し宥める道もござらう。御屋形の御座
所近く推参いたしたと申すからは、罪科は所詮逃れますま。

い。

(雑色登場)

雑色 只今これへ曾我の五郎を召連れてまゐりまする。

(雑色退場。五郎登場。大見小平太實政繩を取る。狩野座を進む。)

狩野 曾我の五郎承れ。只今これへ召されたは、某と新開とが承つて、敵討の宿意を尋ねる爲ぢや。さあ逐一に申し立てい。五郎(怒る)だまれ狩野介。祖父伊東の次郎祐親が將軍家と不和のため、自滅に及んでから以來、久しく落魄いたいてをるが、某とても遠祖左大臣藤原の武智磨が流を汲む、由緒ある身分ぢや。申す程の事はぢきに申さう。若しそれがかなはぬなら、何事も申すまい。

狩野 怪しからぬ事ぢや。某は君命によつて尋ねる。

武智磨
不比等の子
藤原南家の祖

新開 それを彼此申すのは犯人の身となつても、まだ君に楯つく所存か。

頼朝の頼朝 (籠の内より) いや、待て、狩野、新開。曾我の五郎が申す條、尤もなれば、頼朝みづから聽いて遣はす。

(籠を半ば捲く。頼朝登場。舍人二人、近臣二人隨ふ。狩野退く。新開中央に残る。)

五郎 (新開)そこを退いて貰はう。これより物申すに、和殿がそれにあては、和殿に物言ふに似て、快うない。

將軍 新開退いて遣はせ。

新開 はあ。(新開退く)

將軍 見れば昨夜の雨に、その土は濕つてゐる。誰かある。曾我の五郎に敷皮を取らせい。

卒 はあ。(卒、右手より敷皮を持出て敷く。)

五郎（感激す）

此の敷皮を見るにつけ、
十年の昔ぞしのばるゝ。

年頃六波羅に勤仕して、平相國親子の覺めてたく、名利のため
に訴訟を構へ、怨毒によつて殘害を行つた、小賢しき敵工
藤が、時勢の移り變るに乗じて、宇佐美殿によつて御目見え
を賜はり、伊東の莊を拜領し、猶それにも飽足らいて、我々兄
弟を殺さうと、讒舌を揮うた爲、

兄一萬は十二歳、

此の箱王は十の時、

由比が濱邊に伴なはれ、

引据ゑられし敷皮は

夢見ごちに春を待つ

平相國親子
平清盛及其の子
宗盛

荅を推きし悲涙の座。

今は首尾好く父の仇工藤を討つて怨をはらし、此の世に思
ひ置くことなければ、

最後を急ぐわが爲に、

此の一枚の敷皮は、

父に見えん彼岸に

渡す弘誓の舟筏

有難く拜領いたす。（歎く）

將軍 殊勝な覺悟ぢや。然らばみづから尋ねるが、此の度工藤を
討取つたのは、年頃の企か、但しは俄かの思ひ立ちか。

五郎 それは申すまでもない事。我等が父を討たれたは、十七年
の昔。兄は五歳某は三歳しかと、意趣をも存ぜなんだが、兄
が九つ、某が七つになつて、物心を辨へてから以來は、片時忘

れぬ復讐でござる。

將軍 然らば伊豆にある工藤が十年の久しい間、月に四五たび、乃至十度も鎌倉へ通うたに、なぜ途中では討たなんだ。

五郎 いかにも其の往返には心を附け、足柄箱根、大磯、小磯、由比、小坪のあたりにたゞずみ、兄弟附け狙うたが、身分ある彼が同勢、多き時は百騎に餘り、少き時も五六十騎、衆寡敵せず控へ申した。

將軍 ふん、さもあらう。さて工藤は父の仇ゆゑ仔細はないが、多くの麾下の侍をば何故妄に傷つけた。

五郎 固より我等兄弟はかゝる狼藉を企てたからは、双向ふものあらん限り、千萬騎をも切りなびけうと存じたが、我等の名告る聲を聞いて、足の立所も知らず逃行くゆゑ、後日のため一太刀つつ印を附けたまででござる。

將軍 して、大藤内はなぜ討つた。

五郎 あれは笑止なものでござつた。恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆゑ、切りすてはいたいたが、所領安堵を喜んで下國する途中、報謝のために引返したは、せめてもの心掛、今はなか／＼不便に存ずる。

將軍 神妙な詞ぢや。ぢやが、それ程義理を辨へたそちが、既に敵を討つた上、なぜ予が座所に踏込んだ。

五郎 これは憚ある申し條かは存ぜぬが、流人となられた將軍家の御爲には、祖父伊東の次郎は東道主人ではござらぬか。それが成行とは申しながら、三浦殿に預けられて自滅いたした。又敵工藤は格別の御引立を蒙つた。これらの遺恨なきにあらねば、一太刀お恨み申した上で、自害いたす覺悟でござつた。

伊東次郎
名は純親、禰家
の子
治承四年（一一八四）
年自殺
三浦殿
名は義澄
義明の第二子
正治四年（一一八五）
歿
年七十四

將軍 おう。 好う藏さずに申したぞ。 此の度の金を前以て存じてをつた同志のもの、乃至手引のものがあらう。 事の序にそれも申せ。

五郎 さやうなものは一人もござらぬ。

將軍 さはいへ、母には打明けたであらうな。

五郎 こは仰とも存ぜぬ。 鳥獸も子をば思ふ。 二人の子供に死に行けと申す親のござらうや。

將軍 おう。 一族否運に陥つたそれが申し條としては、一々尤も至極に存する。 仁田の四郎はをらぬか。

仁田の聲 (上手背後にて) はあ、四郎忠常只今それへ。

(仁田、首桶を持ち、登場)

仁田 仰によつて、曾我の十郎が首級、これに持参いたいてござる。
將軍 五郎。 兄に逢はせて遣はすぞ。 それ、いましめ解け。

(大見、五郎の縄を解く)

仁田 實驗の上申し請ひ、和殿に見せる十郎が首級ぢや。 いざ對面いたされい。(首桶を開く)

五郎 懐かしや、兄上。

點し列ねし松の火の

消えなば共にと思ひしに、

不覺を取つて縛められ、口惜しくもながらへ申す。 さるにても、兄上、どうしてお討たれなされたか。 よし仁田殿は猛くとも、時致だに居合せたら。

仁田 いや、和殿の助太刀までもない。 十郎が鋭き太刀風に、某は切りまくられ、右の肘と小鬚とに薄手をさへ負うたれど、十郎が運拙く、我が薙刀に拂はれて、刃はぼつきと、鰐元から五郎なに。 兄上の太刀が折れたとか。 なぜ我が太刀を兄上に

佩かせなんだか。

仁田 おう。その悔み道理至極ぢや。某とても一門の十郎ゆゑ、首討つ所存はなかつたが、引かうといった某を、十郎みづから呼止めて、首を我が手に授けたのぢや。

五郎 さてはよしみある御身が手に、兄上好んで掛かれたか。

(五郎歎く。犬房丸鞭を持ち、走り出づ。)

犬房 父上の敵思ひ知れ。(五郎を鞭うつ。)

五郎 や、この小童は何者ぢや。(五郎睨む。犬房たじろぐ。)

仁田 犬房丸、御前ぢやぞ。

五郎 なに犬房丸が御身か。

彼も人の子、穉くて

親を討たれし悲は

いかでか我に異ならん。

果報の繩に引かれずば、

刃を取りて立向かひ、

御身に討たれん我が身なり。

刑場の土になるわしぢや。せめてもの心遣りに、さあ其の

筈で打つてくれい。

犬房 父上を討つたお前は強い人ぢやと思うたに、優しい事を言

うて下さる。それではどうも打たれませぬ。

五郎 おう。さうか。さあ、につくい小わつば、打たれるなら打つ

て見い。

犬房 なんの打たいで。おのれが、おのれが。(連打す。)

將軍 もう好い、好い。犬房、それで堪忍いたせ。

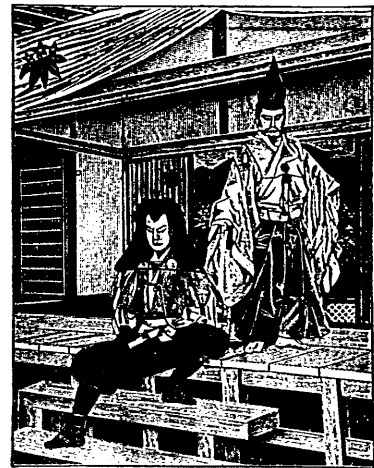
犬房 はつ。(鞭を棄てて平伏す。)

將軍 五郎。此の上問ふべき事もないが、頼朝閨外の職を辱うし

閨外の職
上古王者之遺、
將也、跪而推、
曰、閨以内者、
人制之、閨以外
者將軍制之。
(史記)

て、勇士猛卒を惜しむこと何物にも譬へられぬ。どうぢや、志を翻して奉公致してくれまいか。

五郎 それは存じも寄らぬ事。若し處刑を宥められて、行住心に任せるなら某は犬房に此の素首を取らせ申さう。犬房が討たいでも、近き恵に代へられぬ遠き恨のまつはれば、いつ謀反人にならうも知れぬ。一しよに死なうと誓うた兄を、久しう待たせるも心苦しい。首刎ねられるを待つ外ござらぬ。(大見にさあ繩を打たれい。大見 いや、某は五郎丸が掛けた儘の御身の繩を、君命によつて預



姿榮舞郎五我竹

り、君命によつてほどいたばかりぢや。御身に繩打つすべを知らぬ。

將軍 待て、勇士を失ふは遺恨ながら、其の志は奪ふべからず。五郎が繩は頼朝が手づから打つて遣はさう。

五郎 (居直る) こは思ひも掛けぬ仰ぢや。今生の思出に、さあ御繩を拜領致さう。

將軍 (起つわが打つ繩は不動の綱索、難伏のそちには、ふさはしからう。いでく。

(階を降らんとす。幕)

(鷗外全集)

五 かはほり

加藤千蔭
歌人
芳宜園と號す
江戸の人
文化五年夏
年七十四

かはほりの飛びかふ軒は暮れそめて

なほ暮れやらぬ夕顔のはな

加藤 千 蔭

三八

隅田川藁きて下すいかだしに

霞むあしたの雨をこそ知れ

花になく管水に
すむかはづの聲
をきけばいきと
しいける物いづ
れかうたをよま
ざりける

香川景樹

歌人

島取の人

天保十四年
歿七十六

小澤蘆庵

歌人

京都の人

享和元年歿
年七十九

ほとゝぎすしばく啼きし明方の

山かきくもり小雨ふり來ぬ

鶯のあかつきおきの初聲に

今はとしらむ春の夜の月

小
澤
蘆
庵

香川景樹

加藤千蔭筆蹟

大堰川月と花とのおほろ夜に

ひとりかすまぬ浪の音かな

里の犬の聲のみ空の月にすみて

人はしづまる宇治の山影

賀茂眞淵

賀茂真淵

國學者

眾人

連江の人

明和九年癸卯
年七十三

信濃なるすがの荒野を飛ぶ鷲の

つばさもたわに吹くあらしかな

おろしやう

[illegible]

李義山

賀茂真淵筆蹟

名は空心
 大坂の人
 元禄十四年歿
 年六十二

釋契沖

村田春海

國學者

江戸の人

文化八年歿
年六十六

夕雲雀芝生に落ちて聲やめば

山よりのぼる春の夜の月

村田春海

雪降れば千里もちかしおばしまの

もとよりつゞく富士のしば山

たまりて葉ま
だ見せぬ花びら
の濡れ色きよし
蓮の朝露

曙寛

橋曙寛

歌人

井手氏

福井の人

明治元年歿
年五十七

やうやうと春の夜は
さびしき山に
雪降れば千里もちかしおばしまの
もとよりつゞく富士のしば山

曙寛 筆

すくくくと生立つ麥に腹すりて

つばめ飛びくる春の山畑

橋曙寛

清水漬臣

國學者

江戸の人

文政七年歿
年四十九

つり絲に吹くゆふ風の末見えて

入日さびしき秋の川面

清水漬臣

六 短歌評釋

齋藤茂吉

この朝け戸をあけて見ればうら山の裾まで白く雪ふりに
けり 島木赤彦

「朝け」は朝明けである。今朝戸をあけて見ると、自分の家の裏に
續いてゐる山の、その裾のところまで、眞白に雪が降つてゐたと
いふ意味の歌である。

意味も言葉も平淡で、ごく分り好い歌であるが、歌の價值から
いへば、高級な部類に屬するもので、古人のものの間に伍して、毫
も遜色のないものである。

それは、裏山の裾まで白く雪ふりにけり」といふ實際の景色を見つけたところに第一の優れた點があり、それに深い感動が籠り、極めて素直にいひあらはしたところに第二の優れた點がある。作者は言葉の上の誇張もなく、殊更に歌人ぶつた厭味もなく、當然のやうな言葉で有りのまゝを現してゐるが、これがやがて歌の極致であつて、この一首を幾度も幾度も詠んで見ると、その調べの好いところが感得される。この歌は初學者に取つてもためになり、永年歌を詠むのに苦勞をした人に取つてもためになる歌である。「裾まで」といひ、「白く」といつた、一見執拗なやうな所に、作者が如何に苦心してゐるかを見遁さないやうにして欲しいのである。

おもてにて遊ぶ子どもの聲聞けば夕かたまけて涼しかりし

古泉千樫

古泉千樫
歌人
本名は幾太郎
昭和二年歿
(二五四六—二
五八七年)

これは作者が病氣で寝てゐた折の歌で、夏の暑い日に部屋に寝てゐて、夕方になつた時分に、外で遊び戯れてゐる幼童の聲を聞きながら詠んだものである。「夕かたまけて」は、夕方になつてといふ意味である。

一首の意味は、今日は實に暑い一日であつた。然し、外で遊んでゐる子どもらの元氣さうな聲を聞くと、外は夕方の涼氣が及んだのであらうと、かういふのである。これは病床吟であるといふことを念頭に置き、子どもといふ中には、自分の子も混つてゐるといふことを考慮に置いて味ふべきであらう。

この歌も實に分り好い方であるが、前の歌よりも物柔かで、感傷的である。その感情が如何にも自然で、水の流れるやうに流露してゐる點に、優れた特色をもつてゐる。この歌も高級な歌で、誰に取つてもためになり、何時の時代にあつても顧みられて

可いものと思ふ。結句の「涼しかるらし」には千鈞の方が籠つてゐる。この結句にせよ、前の歌の結句にせよ、短歌では、結句といふものが如何に大切であるかといふことを感得させる好適例である。然し、このことは、自分でじり／＼と悟入するより外はない。

伊藤左千夫

本名は幸次郎

歌人

小説家

大正二年歿

(五三—五五)

まづしきに堪へつゝ生くるなど思ひ春寒き朝を小庭掃く
なり 伊藤左千夫

貧しい暮しをし、大勢の子供を抱へて働いてゐる相當の年配の人が、早春の一日に、暫く静かな気分になつて詠んだ歌である。さういふ生活の背景がこの歌に出てゐるし、その心には、現世を厭ふとか、怨むとか、呪ふとかいふやうな、とげ／＼した感情はなく、暫く現實の苦しい貧しい生活を傍觀するといふ、複雑な心持がこの歌の特色をなしてゐるし、するので、この歌は若い人た

ちには一向に面白くないかも知れないが、世故に苦しんだことのある人とか、今現に苦しんでゐる人とかには感銘が深いのである。

いひ現し方も、どちらかといへば訥々として居り、生くるなど思ひのあたりは特に調子が好くないやうだが、そこにも深い味がある。かういふ風に、ちよつと讀んで見ては味のないやうな歌にも、目を留める必要がある。

ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲ながくたなびける
見ゆ 正岡子規

これは、その病床から上野の森を見ながら詠んだ歌である。「月あかし」は月の明かなことで、こゝでは明月の夜を指す。淡々と歌つてゐるが、それでゐて、實に物の感じ方も鋭く、凡手には及び難い旨さがある。

上野の森
東京市下谷區上
野公園の地小丘
をなす
子規はその東北
麓に近い根岸町
に住んだ

ただ時代が古く、年も若かつただけ、前に掲げた歌などに較べて幼稚な點がある。然し初學者は、この邊の歌に出發點を求めるのが順序であり、正道であると思ふ。

七 箱根路

正岡子規

正岡子規
俳人、歌人
伊豫松山の人
明治三十五年歿
年三十六

大磯
神奈川県中郡大磯町
國府津「コフジ」
神奈川県足柄下郡國府津町
小田原
神奈川県足柄下郡小田原町

われ浮世の旅の首途してよりこゝに二十五年、南海の故郷をさまよひ出てしよりこゝに十年、東都の假住居を見すてしよりこゝに十日、身は今旅の旅に在りながら風雲の思ひ猶已み難く、頻に道祖神にさわがされて霖雨の晴間をうかがひ、草鞋よ脚絆よと身を繕ひつゝ、一個の袱紗包を浮世のかたみに擔うて、飄然と大磯の客舎を出てたる後は、天下は股の下杖一本が命なり。

旅の旅その又旅の秋の風

國府津・小田原は一生懸命にかけぬけて、はや箱根路へかゝれ

ば、何となく行脚の心の中嬉しく、秋の短き日は全く暮れながら、谷川の音耳を洗うて、煙霧模糊の間に白露光あり。

白露の中にほつきり夜の山

湯本
神奈川県足柄下郡湯本村箱根山の北麓



正岡子規

湯本に辿り着けば、一人のをこの袖を控へて、「いざ給へ、善き宿まゐらせん」といふ。引かるるまゝに行けば、いとむさくろしき家なり。前日來の病もまだ全くは癒えぬに、此の旅亭に

まゝに
村や湯本
箱根路

正岡子規筆蹟

一夜の寒氣を受けんこ
と氣遣はし
く、やゝ落膽したるがまゝよ、これこそ風流のはじめ、行脚の眞面

寒食に寂しき村
や花大根 升

目なれ。

だまされてゐるい宿とる夜寒かな

つぎの日まだき起出でつ。一天晴渡りて、瀧の水朝日にきら
つくに、鶺鴒の小岩づたひに飛びありくは、逃ぐるにやあらん、は
たこなたへとしるべするにやあらんと、草鞋の運び自ら輕らか
に、箱根街道のほり行けば、鶺鴒の聲左右にかしまし。

我がなりを見かけて鶺鴒の鳴くらしき

色鳥の聲をそろへて渡るげな

秋の雲瀧をはなれて山の上

谷に臨める、かたばかりの茶屋に腰掛くれば、秋に枯れたる婆
様の挨拶、何となくものさびて面白く覺ゆ。

見おろせば、千仞の谷間より木を負うて上り來る樵夫二人三
人のそり／＼ともものもえ言はて、汗を滴らすさまいと哀なり。



(筆 重 廣)

路 根 箱

樵夫二人だまつて霧をあらはるゝ

樵夫も馬子も皆足を茶屋にやすむれば、それぐにいたはる
婆様のなさけ、一碗の澁茶よりも猶濃し。

犬蓼の花くふ馬や茶の煙

店さきの柿の實つくく烏かな

「名物ありや」と問へば、「力餅といふものあり」とて、大きな餅の
焼きたる二つ三つ盆に盛り来る。

山姥の力餅賣る薄かな

など戯れつゝ、力餅の力を假りて上ること一里餘、杉、樅の大本
道を夾み、元箱根の一村目の下に見えて、秋さびたるけしき、仙源
に入りたるが如し。

紅葉する木立もなしに山深し

千里の山嶺を攀ち、幾片の白雲を踏碎きて、上り着きたる山の

元箱根
箱根山の頂上に
ある山



箱根の路

頂に、鏡を磨き出せる蘆の湖を見そめし時の心廣さよ。餘りの絶景に恍惚として立ちもえ去らず、木のくひぜに坐してつく／＼と見れば、山更にしん／＼として、風吹かねども冷氣冬の如く足もとよりのほり、腦天にしみ渡るこゝちなり。波の上に飛びかふ鵜鴒は、忽ち來り忽ち去る。遙かの空に、白雲とのみ見つるが上に、兀然として現はれ出でたる富士、こゝからも猶三千仞はあるべしと思ふに、更に其の影を幾許の深さに沈めて、さざ波に縮めよせられたる、またなくをかし。これより山を下るに、見渡すかぎり皆薄なり。

箱根の開はいづちなりけんと思ふものから、問ふに人なく、探るに跡なし。二十餘年前までは、金紋先箱の行列整々として、鳥毛片鎌など威勢よく振立て／＼行きかひし街道の繁昌も、あはれものの本にのみ残りて、草刈るわらべの小道一筋を除きて外は、草の生出でぬ處もなく、僅かに行列のおもかげを薄の穂にとどめたり。

槍立てて通る人なし花芒

(彌祭書屋俳話)

八 消息二篇

高山林次郎

十月九日 東京より 國元の弟良太へ

高山林次郎
櫻牛と號す
文學博士
評論家
山形縣の人
明治三十五年歿
年三十二
十月九日
明治廿七年
鶴岡
山形縣鶴岡市

涼氣日にまし骨にしみ申候。當地は兎角雨天勝にて、今日よりやう／＼晴天と相成候様に御座候。此の模様にて見れば、鶴岡の寒さも一入思ひ遣られ、氣づかはしくてならず

候。此頃は如何朝夕を暮され候やらん日夕懷慕の情に堪へず。このごろの御書のとだえしも、何か心にかゝりてならず、はがきなりとも、氣のむきし時は是非々々御送被下度

候。何事も氣長に、くよくよ思

はざる様可被成候。



高 山 樗 牛

栗名月も近づき申候。國元の
こと、おんみのこと思ひ出され
く、てならず。別れし時、おん
みの杖によりて門に佇立せる

狀、嗚呼々々目先にちらつき申候。いかなれば御身はた我、
かくは天の兩方に心ならぬ月日を送るぞや。秋深し、月高
し、霜と露もやがて雪とふりみだれんず。氣永く心まかせ
に、養生專一に被成下度、祈上申候。胸に滿ちくし此の思

は、只おん身の推察にまかすべく候。かしこ。

十二月三十日 東京より 國元の實父へ

十二月三十日
明治廿七年
實父
齋藤親信

只今良太臨終の模様讀了、一字一涙感に堪へず候。先日歸
宅せざりしは私一生の過失、良太に對し面目無之、良太もさ
ぞさぞ無情のものと恨みつらん。之を想へば心とがめて
ならず、何卒御察被下度候。良太生前の書翰等見るにつけ
て、ひし／＼と胸にこたへ、千萬の感情交起、うき世がとんと
嫌に相成り申候。良太は今頃どこに居り候やらん。一生
を契りし我等兄弟、兄のみ残りて弟は却て冥途の人と相成
候は、なんぼう薄き此の世の縁に候や。私一生の樂の半分
以上は、たしかに良太の死と共に消去り申候。年さへふれ
ば、ありしことさへ人は忘れはてて、爲に涙をそぐ人は身

信策
良太の次の弟

小泉八雲

歸化人

ラフカデオ

ハーン

文學者

東京帝國大

學講師

明治三十七年夏
年五十五

内のももの五六人にすぎず、一基の石塔にかへらぬ昔の名残をととむ。想へば、憐れなる良太の生命に御座候。病中に私によせし同人の手紙、今日よりうつしなほし、一冊として御膝下にさし上候間、冬の夜長に信策にでも讀ませ、おんこゝろやりとなし下され度、同人の私によこしたる手紙は、頗る同人の氣質をうつししものに御座候。 (稿牛全集)

九 松江の朝

小 泉 八 雲

松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底でゆるやかな大きな脈が搏つやうに響いてくる米搗の音である。杵の落ちる響が一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の日常生活に伴ふあらゆる音響の中で最もあはれに思はれる。米搗の音は日本といふ國土の脈搏である。

洞光寺
松江市雄賀町に
ある曹洞宗の寺

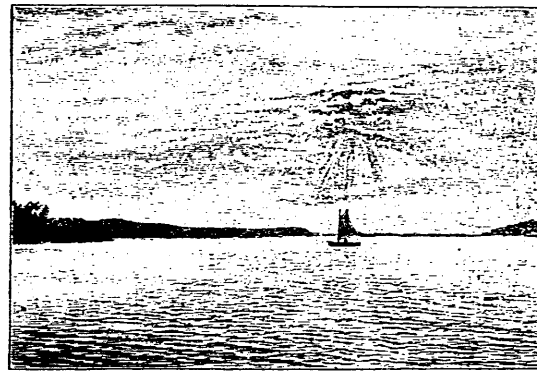
大橋川
中海と宍道湖と
の間を通ずる川



小 泉 八 雲

それから禪刹洞光寺の大きい鐘がどうんと響いて、市街の空を撼がせる。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から太鼓の淋しげな音が、晨の勤行を告げる。最後に行商人の物賣の聲、大根やい蕪菁や蕪菁、薪や薪。

明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の底から伸びた春の若葉の軟な緑の雲越しに、朝景色を眺めやつた。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、わな、くやうに萬象を映寫して、微に光つてゐる。この川は宍道湖に向つて口を開け、湖を右手へ擴がつて、杳乎たる連丘に包まれてゐる。對岸の日本の家屋は戸がみな閉つてゐるので、恰も箱を閉ぢたや



湖 道 央

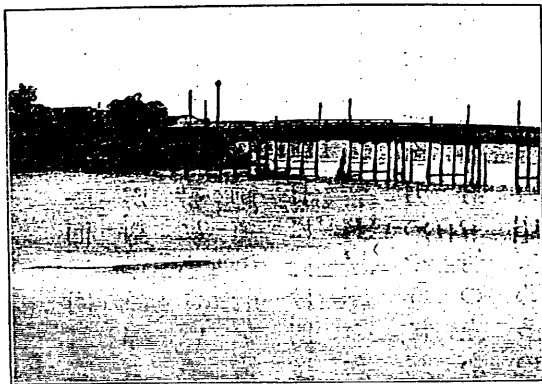
うである。夜は明けたが、日はまだ出ない。遙に見渡すと薄色の霞が湖水の盡端に長くたなびいてゐる。その星雲状をなした長い帯は、日本の昔の繪で見る通りであるが實際の現象を眺めたことのない者には、畫工が奇を衒つたところか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽うて、峰から峰へ、はて知らぬ長さの紗のやうに横に延びてゐる。だから湖水は實際より遙に大きく、味爽の空の色と入交つた美しい幻の海となつて見える。山々は霧の中に浮ぶ島嶼で、夢のやうな一帯の丘陵は、はてしのない土手道かと怪しまれる。

そして霧が立つに連れて、その趣は徐に變つて行く。朝日の黄色な縁が見えてくると、今までのよりは更に強い、細やかな光線

——分光鏡の紫と青貝色——が

水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水のかなたにある高い建物の木地の色が、美しい靄の色で蒸氣立つ黄金色へとかはる。

朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が、今しも帆を揚げんとしてゐる。こんな奇妙な恰好の美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢である。霞にぼやけた船の精靈である。しかしこ



橋 大 江 松

の精靈は雲と同様、光線を受けて薄青い光の中で金色に震へてゐる。

庭先の川端から手を拍つ音が起つてくる。一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えないが、對岸の埠頭の石段を下りる男や女の姿は見える。めい／＼帯に小さい手拭を挿んでゐて、顔と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に、必ず行ふ潔齋である。それから顔を朝日に向け、四度手を拍つて拜む。長い橋の上からも、他の拍手の音が反響の如くに出てくる。遠くにある軽い優美な、そして新月のやうに彎曲した小舟からも出てくる。この頗る異様な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黄金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の數が増して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が、今皆朝日——お日様——天照大神を拜んでゐる

杵築の大社

杵築町にある出

雲大社

祭神大國主命

一畑山

島根縣松江市に

ある名刹

本尊藥師如來

からである。「いとも貴き日の造り主よ。この心地よき日光を賜ひて、世界を麗しくなし給ふ事を謝し奉る。言葉はこの通りで、でないまでも、これが無數の人々の衷心である。朝日に向つてだけ手を拍つ者もあるが、大概是西の杵築の大社へ向つてもさうするのである。顔を東西南北へ向けて、群神の名を低聲で唱へる者さへ随分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山の高峰を眺めて、盲人の眼を開き給ふ藥師如來の大伽藍のある處に向ひ、今度は佛教の儀式に随ひ、掌を合せて軽く擦る者もある。しかし日本で最古のこの國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰も誰も古風な神道の祈の文句を唱へる。

「拂ひ給へ、淨め給へ、とほ神ゑみため。」

手を拍つ音がやんで、一日の仕事が始まり出し、橋の上にはからころといふ下駄の音が、だん／＼高く響いて来る。大橋の上

て鳴る下駄の音は、忘れられない音である。速くて、陽氣で、音樂的で、盛な舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんなが爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る、數へきれぬ人の足がちらくするのには驚くべき光景である。その足は皆細くて、恰好が均整を得てゐて、ギリシヤの古甕にゑがいた人物の足のやうに輕やかで、そして足を運ぶ時、指を先に下す。實際下駄では外にしやうがない。それは、踵は下駄にも著かねば、地にも著かないし、足は楔形の木の臺を前へ傾けては進むのであつた。足が下駄の上に立つだけでも、慣れぬ者には困難であるのに、日本の子供は三寸もある臺の下駄を穿いて、親指と他の四本の指に挟んだ前緒だけで足を固定させて、全速力を出して駆けてゆく。それでも躓きもせず、又下駄もぬげない。更に珍しいのは、大人が木履で歩く光景である。これは木の臺に高さ

五寸もある齒が附いて、全體の構造は、木製の長椅子の漆塗の標本かと思はれる。しかしそれを穿いた人は、まるで足に何もつけてゐないかのやうに樂々と濶歩する。

やがて學校へ急ぐ子供たちが出てくる。彼等の駆ける時に、綺麗な飛白の着物の濶い袖が波動すると、大きい蝶が羽搏きをするやうに見える。親船は白色や黄色の大きい翼を擴げるし、埠頭の側で眠つてゐた小蒸氣船は、煙突から煙を吐きはじめた。

(まだ馴れぬ日本の瞥見)

一〇 行く秋の星

野 尻 抱 影

野尻抱影
名は正英
天文文學者
横浜市の人

日が暮れるともう北斗七星が西北の地平に近く寝てゐる。秋風から鳴りする手水鉢の柄杓にたとへては小さくなり過ぎるが、何といつても柄杓の形容が一ばん當つてゐるし、それが

よく合點の行くも今の季節である。
いはゆる斗柄は西を指してゐる。柄の端の星は有名な破軍星だが、それから二・三・四・五までの星をつないで見ると、船を伏せた形に酷似してゐて、舳先も艫もちやんと備はつてゐる。これが島根地方で「ふなぼし」と呼ぶものである。

ところで、いつも答へに困るのは、この七つ星をこめた譯名の大熊座である。兎も角、熊は今頭を地平へつツこんでゐる。柄杓の柄は横腹で、柄はつまりしつぽである。何と長い熊のしつぽか？ これを擱んで空へ投り上げた時に長くなつたといふのが傳説である。

大熊座に對してすぐ右に小熊座がある。不思議なほど相似の形をしてゐる。それで、小北斗の名もあるし、日本でも静岡の或地方ではこれを「小しちよう」と呼んでゐるといふ。この方の

小しちよう
七曜七七斗

Cassiopeir
カシオペイア座

Curve
カーヴ
曲線

しつぽの先は北極星で、小熊はしつぽをこの金の鉾で空に留められて北の空をぶん廻り、その外を大熊がのたりのたり廻つてゐる意匠である。

北極星を見出す方法は、小學生も知つてゐる通り、北斗の柄の端の二つの星——指極星を結んで右へ五倍だけ延ばすのだが、それを北極星を過つてから更に東へ同じ長さほど延ばすと、カシオペイア座にとどく。誰の目にも直ぐ分るW字を描いてゐる星座で、俗に「天上のW」で通つてゐる。大熊座とは北極星を中心として對蹠になつてゐるので、彼が沈めば、これは天頂へのし上つて來ることを覚えてゐていゝ。

再び北斗へ戻る。その柄をカーヴのまゝに西へのぼして行くと、大きな金色の星にぶつかる。もうほどなく沈む星だが、これがホーマーの「オディッセー」の主人公が、大海に漂ふしるべとし

S ホーミー

Homeros
古ギリ
の大シ
詩ア最
人最

オデイツセー

Odyssey

アルクトール
ス

大角星

Ar

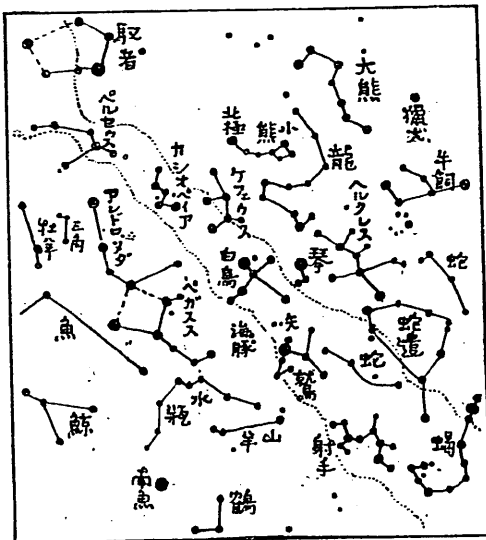
Lyre 抱琴

た牛飼座のアルクトウールスである。星のどれにも古代の神話や傳説がからんでゐるが、この星の和やかな、おほらかな光の印象は、特に三千年の盲詩聖の抱琴を彈ずる姿を、親しみやすく聯想させるのである。

北斗は柄を左にして置かれてゐるが、南西の地平の上を見ると南斗が、これは柄を右にして、しかも伏さつてゐる。この方は六星で北斗ほど大きくはないが、中々に鮮かな星象である。

南斗は簡單には斗で、廿八宿の一であり、斗牛の斗でもある。前にふなぼしを教へてくれた島根の〇君は、同時にこの小さい柄杓の柄を、その地方で「みぼし」といふことを書き添へて來た。いふまでもなく、艸をふるふ箕の形に見立てたので愉快であるが、特に興味を倍にもする事實は、支那で、この南斗の直ぐ右に見える四つの星のいびつな四邊形を、二十八宿の一に數へて「箕」と

呼んでゐることである。見方は同一で、しかも隣り合つた別々の四邊形であるのが實に面白いと思ふ。この斗と箕とを併せ



上圖の下の縁は略し、南の地平に當り、左は東、右は西に當る。今、南天に見える星座は、天頂に近い白鳥とそれを挟む鵠と琴、その南の山羊水瓶、南魚、鶴の諸座及び、南四の射手座、地平に低い蝎蛇造等である。東の中空にはベガスの大正形が、アンドロメダを柄として大きく懸り、魚鯨等が漸く昇り始めてゐる。更に圖を逆にして上の縁を前にすると、天頂から北に鰐、小熊、チーフニス、カシオペア、ペルセウス及び地平に横はる大熊座の北斗を見る。

たものが、今の天文學の射手座である。箕座を斗の柄に結んで出来る大弓と、それに番へた矢とが天の川を隔てて對岸の蝎座を

Hercules ヘル
クレ
ー
ス

射てゐる趣向になつてゐる。この射手は半人半馬の怪人であるともいひ、時には力士ヘルクレースであるともいふ。僕はこ

一〇 行く秋の星

ブルーデル

Boardelles
1861-1929
彫刻家

オリオン座

王維

字は摩詰
支那盛唐の詩人
貴家

れに、嘗て上野で觀たブルトデルの、岩に足を踏ん張つて強弓を
引き絞つてゐるヘルクレイスの彫像を憶ひ浮べる。
蝎座は冬のオリオン座に對し、夏空の最も股賑な部分だつた
が、もうすつかり地平に横たはつてゐる。「蝎の心臓」とも呼ばれ
る無氣味に赤い星は、支那の「大火」で、時に火星とも呼ばれた。王
維の「夜、潤州へ入る」を引くと、

夜丹陽郡に入る

天高うして氣象秋なり。

海隅雲漢轉じ

江畔火星流る。

城郭金柝を傳へ

閭閻綠州閉づ。

客行凡そ幾夜

新月再び鉤の如し。

とある。雲漢は天の川である。「火星流る」は正に今の季節に當
つてゐる。

射手座から左、つまり南の空は星の淋しい部分である。次に

クリーク

Creek

コールサック

Coal sack

は天の川を見たい。これは今、北の地平から天頂に眞珠光の反
橋をかけて、西は射手座と蝎座の間に終つてゐる。天の川を輪
ぶちとしてゐる謂ゆる、銀河系宇宙の中軸は、星の最も賑やかな
この射手座の中にある。そこから目を天の川に傳はらせて行
くと、左岸に三つ星の形に並んでゐるのが、鷲座、その眞中の星が
支那の牽牛である。その三星を結んで天の川を渡らせると、自
然に天頂の近くに、青白く透徹した寶石にぶつかる。これが織
女で、星座は琴座である。たなばたの星が今時分出てゐるのは、
變に思はれるか知れないが、どちらも半年は毎晩見えてゐる星
である。

織女と牽牛との間に天の川にすつくり浸つて五つの星が大
きい十字を描いてゐるのが、名高い白鳥座である。天の川はこ
こで大きな黒いクリークを穿つてゐる。俗に「石炭袋」と呼ぶも

ので、もう一つは南極の近くにある。だが實はクリークでない。いはば宇宙塵ともいふべき物質が黒煙のやうによどんでゐて、天の川の輝面を隠してゐるのである。

終りに東へ向いて、中空を仰ぐ。すると輝星の割合に乏しいところに、四つの星が途法もなく大きな正方形を描いてゐるのを見るだらう。まるで野球場のダイヤモンドである。これが「ベガス座の大正方形」と呼ぶもので、下の縁を北の方へ延すと、カシオペアのWの一角を過ぎつて北極座へとどくから妙である。ベガスはガソリンの名のベガサスで翼の生えた天馬である。明治十年代の水路局の星座名では翼馬座となつてゐる。ベガスより好いと思ふ。

その大正方形の東の一角から、三つの星が連なつてベガサスと共に、とても巨大な北斗の形になるのがアンドロメダ座であ

ダイヤモンド

Diamond

ベガス座

Pegasus

ガソリン

Gasoline

水路局
部 現今の海軍水路

アンドロメダ座

Andromeda

ペルセウス座

Perseus

大佛次郎

本名は野尻清彦
法學士
小説家

一一 狂言

大佛次郎

る。カシオペア女王の娘が巖角へ手首を鎖で縛りつけられて、海魔に吞まれようとしてゐる姿だと言はれ、彼女を救つた勇士ペルセウスは今日の川の中に寶劍を振り上げて昇るところである。

(星座春秋)

御暇乞に藝盡しをお目にお掛可申候とて、御番衆の見申さぬ様に枕屏風の陰にて堺町の踊狂言の眞似を被仕、そろ／＼さわぎ被申、脇に奥田孫太夫・潮田又之丞は御ゆるし被成候へとて臥被居候。又之丞被申候は、とかくあの様に騒ぎ申候間、やがて埒は明可申候へども、先明日は内藏助へ申候て手錠をおろさせ可申と笑被申候。

(堀内傳右衛門覺書)

一番最後に寝る者が消すことになつてゐて、たつた一つ残し

上の間
この浪士たちの
預けられてゐる
のは細川家の下
尾敷である

てあつた行燈の灯が、この廣間の天井にまるい影を置いてゐた。めいゝの枕許に衝立を置いて、並べた九つの床に、もう微かな寢息さへ漏れてゐる。この老人そろひの上の間では早く床に入る習慣になつてゐた。



大佛次郎

まだ、そちこち四つといふ時間だつた。厠から戻つて來た内藏助は、暖味の逃げぬやうに掛けたまゝ、脱け出た床の中に、つめたい廊下で冷えた兩脚を入れながら、枕許に捨ててあつた頭巾を拾つて頭にくゝりにかゝつた。これは人に笑はれながら寒がりの癖で、かうしないと、どうも睡れないのだつた。自分の影が變な恰好をして、蒲團の裾の方にある襖の上で動いてゐた。この、たて切つた襖の

彼方に、疊廊下を隔てゝ、壯年の八人の者がゐる下の間になつてゐた。

内藏助は遠い話聲を聞いてゐた。若い連中はまだ起きて、火鉢を圍んで話してゐるのである。こちらの堀部老人が夜中時時「えい！ えい！」と矢聲をかける癖があるのを聞きつけて笑つたのも、まだ床に入らずにゐた彼等だつたことが頭巾を被つた頭の中の微笑とともに泛んだ。左右の老人たちの睡りを妨げないやうに、内藏助は行燈を消しに立ちかけた。誰か母屋の方から廊下づたひに來る様子だつたので、それに耳を澄した時、自分の隣の床の中で小野寺十内が目をあいてゐるのに氣が付いた。十内もその足音を聞いてゐるのだなと思つた。

足音は、付添ひの番頭のある次の前まで來て停つた。宿直の堀内傳右衛門が立つて用事を尋ねたやうだつた。そ

の次に聞えた聲で、内藏助はこの家中の長瀬助之進といふ男の顔を思ひ出した。長瀬なら今夜は非番の筈だと氣がついた時、かなりはつきりした聲で言ふのが聞えた。

「今お上屋敷から御狀が廻つて來て、明朝こちらへお遣しになると言つた。茶道の衆が持參されるといふから、どうぞそのおつもりで。」

傳右衛門が、すぐと何か答へた。

助之進がまた何か言つたが、これは聲が低くて聞取れなかつた。内藏助は二人の話した意味が直覺出來たのである。急に振返つて十内の顔を見た。十内はもう搔卷から乗出してゐた。二人が無言でゐる内に、助之進が母屋へ引返して行つたらしく、廊下を足音が遠ざかつて行つた。氣がついた時、今まで下の間に聞えてゐた話聲が急に止んでゐた。

十内は搔卷をはねて蒲團の上に坐つてゐた。しかし内藏助はこれに「寢よう」といふやうに目配せして、ふつと行燈を吹消した。眞暗な中で内藏助が寢床に戻つて搔卷をかける氣配が続いた。十内は息を詰めてゐた。「來ましたな」といふ言葉が、變にえがらつぽいものになつて、喉まで出て來てゐた。助之進はあの一句を言ふ時、確かにこちらに聞えるやうに聲を昂めてゐたのである。

十内は、その枕を内藏助の方へ移してから、低い聲で話しかけた。

「一同を起して話して置きませうか。」

「さう……」内藏助は、どつちとも決斷がついてゐなかつた。

二人は無言で、左右に寢てゐるほかの者の寢息に耳を澄してゐた。その途端、疊廊下の彼方で、急に襖のあく音がした。「聞い

てゐたな」と二人は同時に、下の間で急に話聲が止んでゐたことを考へた。誰か二三人で宿直の部屋の方へ歩いて行つた。足音が停つたと思ふと、

「堀内氏と磯貝十郎左衛門の聲がした。」

「ちとお話においてになりませんか。」

これは富森助右衛門である。

黙つてゐた内藏助が寝返りを打つた。起きるのかと思ふと、さうでもない。十内は闇の中で内藏助の様子を見極めようと目を据ゑてゐる。人のいゝ堀内傳右衛門は誘ひ出されて、たうとう下の間へ入つて行つたらしかつた。

内藏助は、十内が何を考へてゐるか知つてゐたのではないか、

「まあ、よからう」と、静かな聲で慰めるやうに言つた。

「行。燈をつけませうか。」

「なんで？」

「……………」

返事は無かつた。下の間でどつと皆で笑ふ聲が聞えた。その笑ひ聲が落ちると傳右衛門が、いつもの質朴な口調で何か話してゐるのが聞える。

（花をくれる……）

細川越中守は浪士たちの處分が愈、明朝としまつたのを、それとなく浪士たちに仄めかさうとしたのだつた。話は如何にも急だつた。その前日まで、浪士たちは先年の市ヶ谷淨瑠璃坂の仇討の場合に準じて遠島になるといふ風説が、根據のあるものとして一般に信ぜられてゐたのである。現に取次の堀内傳右衛門は今もなほそれを信じてゐて、主人越中守が浪士たちを突然で驚かしたくなく、花に託して送つた謎をも解き得ずに、明日

早朝當番の交替前の簡単な雑務の一つとして頭に置いてゐたのだつた。

「左様でしたか。花をお生け下さる茶道の衆がおいて下さる。富森助右衛門は、靜かに笑顔を作つた。堀内傳右衛門はそれ以上を何も言はないでゐた。言ふ必要を認めないのか、或は口止めされてゐるのだらうと思はれた。

助右衛門は、視線を移して、火鉢を圍んでゐた同志の人々を見渡した。大石瀨左衛門、磯貝十郎左衛門、矢田五郎右衛門、近松勘六……順に、何事も知つてゐる眼が助右衛門の視線を迎へて微笑んだ。赤埴源藏は煙管を啜へてゐる。奥田孫太夫は、よく起つた炭の色を凝と睨んでゐる。潮田又之丞は懷手をして、にやにやしてゐる。

暫く誰も何も言はずにゐた。

「お靜かですな。傳右衛門が首をかしげた。

その途端突然に矢田五郎右衛門が吃驚するくらゐ大きな笑聲を擧げた。その爆發するやうな馬鹿笑の底に、何かしら一座をぎよつとさせたものがあつた。

「何がをかしい。急に源藏が、かう叱咤した。

五郎右衛門は無作法に疊の上に仰向きに轉がつてゐた。笑ひはなほ止まなかつた。苦しげに腹を抑へ身をもがいて笑ひ續けてゐるのである。その上へ、孫太夫が躍りかゝつて太い腕で抑へ付けた。

「怪しからん奴だ。何がをかしい。」

「さうだとも、妙な男だ。ひとりて笑ふなどとは怪しからん。」
冗談とも眞劍ともつかぬ權幕で、二三人が五郎右衛門に飛び

かゝつた。五郎右衛門は押倒されながら笑ひ續けてゐるのだ。
「よせ、よせ。助右衛門が止めに入つた。」

さういふ助右衛門自身が、いつもより荒々しく快活になつてゐたのは不思議だつた。

「おい、みんな……と、叫んだ。」

「何かやらう、何か。」

「むゝ。やらう。」

源藏までが、煙管を捨て、立ち上つた。

「何をやる？」

「なんでも……藝盡しだ。堀内氏をお客様にするのだ。」

「馬鹿、俺ア藝なんか何も無い。」

これは奥田孫太夫だつた。潮田又之丞も拙者も見物に廻ると言ひ出した。二人を怪しからんと言ふ者はあつても、この深

四つ
午後十時

夜の藝盡しの興行に異議を申立てる者はなかつた。

「四つを廻つたぐらゐのところだな。まだ早いさ。宵の内だ。こちらは一世一代の腕をお目にかけるのだ。堀内氏、これは滅多に御覧になれるやうなものとは違ひます。」

「左様でございませうとも。珍らしいものを見せて頂きます。傳右衛門はおとなしく客座に直りながら、一同のいつにない騒ぎの底に何かしら嚴肅のものがあるのをおぼろ氣に感じて、顔色をひきしめた。此の人々は御公儀の御沙汰の如何にしろ、やがて、今日まで親しくして來た自分と別れることになるのを考へて、その暇乞のために、こんな催を考へ付いたのに違ひないのである。」

「さあ、拜見いたしませうか。」

「まだです、まだです。樂屋を作らなければならぬ。衣裳が

ないから、この蔭でやるのだ。それから外から見えないやうにしなければならぬ。」

芝居は聲だけのものらしかった。夜、枕許へ立て廻す衝立を、めい／＼が引出して来て飾り付け始めた。見物席の傳右衛門は火鉢を二つまですゝめられて、贅澤に片手づゝあたりながら、これもわざと大盡らしく胸を張つて狂言の始まるのを待つてゐる。さうしてゐて、狂言方も見物も、この騒々しい廣間の中に、冬の名残りの寒さがあつて、胸に徹るのを感じる。やはり見物席に膝を抱いてゐる奥田孫太夫が、劍道で鍛えた聲で、「早くやれ」と、しきりに叫んでゐる。

又之丞は、にや／＼してゐるだけである。

「宜しいのですか。捨てて置いて。」

小野寺十内は我を忘れて腕を伸した。その手は闇の中で内藏助の頭巾にふれた。

「何が。」

内藏助は急に氣が狂つたやうにその手を拂ひのけた。その權幕に驚く前に、十内は自分の指がふれた頭巾をつめたく濡してゐるものを知つて、はつとしてゐたのだつた。

「推参なり景政、雷丸の切れ味を受けて見よ。」

下の間では助右衛門の聲色が聞え、一同でどつと笑ひ上げるのが聞えた。

「よい、よいと申すに、と、内藏助は強く言つた。

十内の目の前に、襖の合せ目から漏れる灯影が鋭い針の様に細く立つてゐた。そのほかは、早春の冷たい夜闇だ。

堀部彌兵衛老人の、騒ぎに無關心な靜かな鼾の聲がしてゐる。

十内は泣いてゐた。ほろ／＼と聲もなくあふれ落ちる涙だつた。内藏助は氣配にこれを知つて、

「いゝさ、いゝさ。」

と優しく繰返した。

(赤穂浪士)

一二 如意輪堂

阿部野の合戦は霜月二十六日の事なれば渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱替へさせて身を溫め、藥を與へて創を療せしむ。此の如く四五日皆勞りて馬に乗る者には馬を引き、物具失へる人には物具を着せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感じる

阿部野

攝津國東成郡に

あり

霜月二十六日

正平二年

四條繩手

大阪府中河内郡

兩度の合戦

河内國磐田林の

戦と阿部野の戦

將軍

足利尊氏

左兵衛督

足利直義

淀

京都府久世郡

四條中納言

藤原氏

吉野朝の忠臣

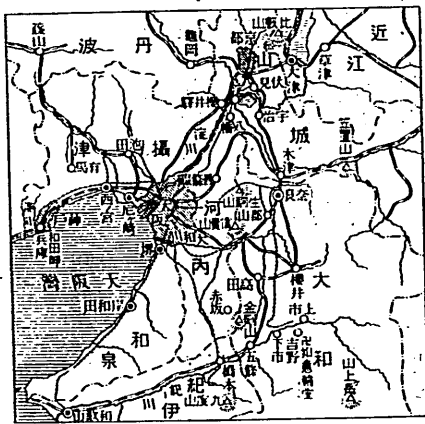
男山で戦死した

(四三)

人は、今日より後、心を通ぜんことを思ひ、その情を報ぜんとする人は、斃て彼の手に屬して、四條繩手の合戦に討死をぞしける。

さても今年兩度の合戦に、京勢無下に打負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はる。遠國亦蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の周章、只熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏國々の催し勢などを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海・二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く、淀・八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條



有得の身
凡夫無常の身

鎮守社境回録ノ
事殊ニ以テ驚キ
致キ入リ候、但、
神體火中焼失セ
ズ御座候条、末
代ノ御瑞言諸道
諸公餘カ。スベ
テ奏聞ヲ經ベク
候。恐々謹言。
五月廿六日
正行花押
親心寺々僧御中

中納言隆資を以て申しけるは、父正成、厄弱の身を以て大敵の威を辟き、先朝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、鎮守社境回録事候ハ、
勢、敵入、仁神存、不統
失火中、焼失、不統
身、瑞言、諸道、諸公、餘カ、スベ
テ奏聞、ヲ經、ベク、候、恐々、謹言、
五月、廿六、日、
正行、花押、
親心、寺々、僧御、中、
申し置きて死にて候。然るに正行正時已に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を辟き合戦を仕り候はずば、且は亡父の申しし遺言に違ひ、且は武略の言甲斐なき謗に落つべく覚え候。有得の

就、中、納、言、隆、資、

オ、ウ、キ、

正、成、

正 行 正 時

逆臣西國より攻上り候ひし間、危きを見て命を致す所、豫て思ひ定め候ひけるかに依つて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。その時、正行十一歳に罷り成り候ひしを合戦の場へは伴なはて河内へ歸し、死残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に即け參らせよと

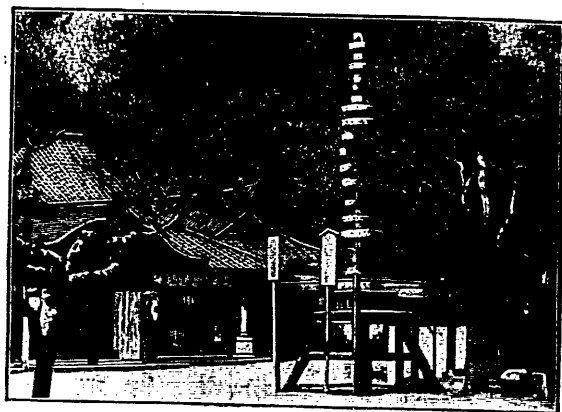
龍顏
天子のおかほのこと、史記にある

南殿
禁裏殿のこと
諸殿の最南にあるから

身思ふに任せぬ習にて、病に犯されて早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直師泰にかけ合ひ、身命を盡くし合戦仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行正時が首を彼等に取り候か、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らん爲に、參内仕つて候。と申しもあへず、涙を鎧の袖に懸けて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる先に、先づ直衣の袖をぞ濡されける。
主上乃ち南殿の御殿の御簾を高く捲かせて、玉顏殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つ事を得て、敵軍の氣を屈せしむ。叙慮まづ憤を慰する條、累代の武功返すも神妙なり。大敵今勢を盡くして向かふなれば、今度の合戦天下の安否たるべし。進退度に當り變化機に應ずる事

は、勇士の心とする所なれば、今度の合戦命を下すべきにあらず
と雖も、進むべきを知つて進むは、
時を失はざらんが爲なり、退くべ
きを見て退くは、後を全うせんが
爲なり。朕汝を以て股肱とす。
慎んで命を全うすべし。と仰せ出
されければ、正行頭を地につけ、と
かくの勅答に及ばず、只之を最後
の参内なりと思ひ定めて退出す。
正行・正時・和田新發・意舍弟新兵
衛以下、今度の軍に一足も引かず、
一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟
に参りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪

如意輪堂
大和國吉野郡吉
野塔尾にある



如意輪堂

堂の壁板に、各名字を過去帳に書きつらねて、その奥に
かへらじとかねて思へば梓弓

なき數に在る名をぞとむる

と一首の歌を書留め、逆修の爲と覺しくて、各鬚髪を切りて佛殿
に投入れ、その日吉野を打出でて敵陣へとぞ向かひける。(太平記)

一三 新月

北原白秋

北原白秋
名は隆吉
詩人
福岡縣神河町の
人

斷岸の松の木に

月ほそくかゝりたり、

ほそき月、

金無垢の月。

入海の波間にも

また月はしづきゆく

沈々と

金の鈎

金無垢のするどさよ

絹漉の雨ののち

しんじつに

走りいづるその蒼さ

島黒く、海黒き

眞の闇

舟ひとつすゝみゆく

そのうへにほそき月

なにかわかね

魚族は目をさまし

鈴蟲は一心に鳴きしきる

虔の極まり

闇の夜は斷岸も、松の木も

かげわかず、ゆく舟も見えわかず

たゞ光るほそき月

金無垢のほそき月

(畑の祭)

相馬御風

名は昌治
文學者
新潟縣糸魚川町
の人

一四 郷土の魅力

相馬 御風

甚だ陳腐な事のやうであるが、郷土といふものの、人間の心を惹きつける作用は不思議なものである。一方に、月日は百代の過客にして、往きかふ年も亦旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて生を迎ふるものは、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予はいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思やまず、といひ、或は、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん。これ天の命なり、などといつてゐたかの芭蕉翁でさへ、他方に於ては、代々の賢き人々も、古郷は忘れ難きものにおもほえ侍るよし。我今は初の老も四とせ過ぎて、何事につけても昔のなつかしまゝに、はらからのあまた齡傾きて侍るも見捨てがたくて、初冬の空のうちしぐるゝ頃よ

伊陽
伊賀國

一茶
おのれがすがた
にいふ
ひいき目に見て
さへ寒きそぶり
かな

柏原
長野縣上水内郡

り、雪を重ね霜を経て、師走の末伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせばと、慈愛の昔も悲しくおもふ事のみあまたありて、ふる里や臍の緒に泣く年の暮、などといつてゐる。

あつち

あつち

一茶

故郷は蠅まで人をさしに
けり

ひいき目

あつち

あつち

一茶
故郷は西も東も茨の花
といつた風に、永い間自分の
故郷を呪つて旅から旅へと

漂泊してゐた、あのすね者の
俳諧寺の一茶ですら、晩年に
は、これがまあつひのすみかか雪五尺などと驚きながらも、その
雪の深い信濃柏原の郷里に歸り住んで、そこで一生を終へた。
更に、かの近世稀有の聖僧と云はれる越後の良寛和尚の如き

も、二十二歳から四十三歳までの二十餘年間の雲水行脚の旅にあきたらないで、それ以來ずつと越後の郷里に孤獨な庵住生活をつゞけて、靜かな往生を遂げてゐる。

故里へ行く人あらばことづてん

けふ近江路をわれ越えにきと

草枕夜ごとに結ぶやどりにも

むすぶはおなじふるさとの夢

などといふ彼の旅中の歌を讀んでも、いかに彼が故郷を慕ふ思の切なるものであつたかを察することが出来る。

二十三歳で妻子を振棄てて佛門に歸し、諸國修業の旅に出た

西行も、

柴の庵のしばし都へかへらじと

思はんだにもあはれなるべし

西行
歌僧
俗名佐藤義清
元鳥羽上皇の北面の武士
建久元年京都に歿
年七十三

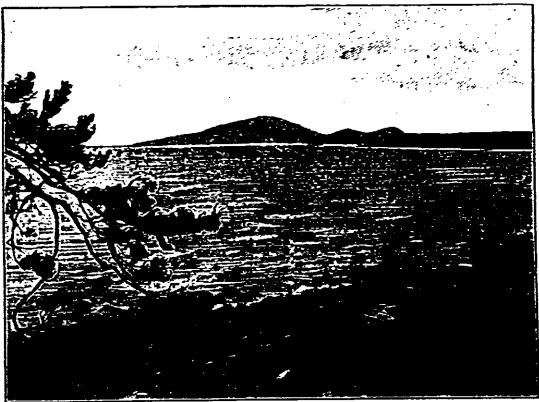
世の中を捨てて捨てえぬ心地して

みやこ離れぬ我が身なりけり

などと歌つて居り、且晩年には都に歸つて死んだ。

かういつた風に、昔からの代表的な漂泊の人々さへも、不思議に彼等の生まれ且育てられた郷土に對しては、しかく切なる愛慕の情を持つてゐた。抑、この郷土の人間に對して持つてゐる魅力は、どこから來るであらうか。

それは全く「何とはなしに」である。理智的判断によるものでもなく、功利的見地からでもなく、



眞寬の故郷出雲時

或は特に美的判斷の然らしむるといふでもなく、それはたゞ何とはなしにである。郷土の人心を惹きつける魅力は、實にこの何とも言ひ現されないとこから發する。それは自然と人間と、過去と現在とを一つに融した、一種不思議な音樂的な魅力である。また私達が郷土を慕ふ心は、全く自分にもよくわからない内心自發の情緒である。いかなる力を以てしても否定したい本然的情緒である。この不可思議なる情緒の存在してゐる事實は、おそらく如何なる理智の人と雖も、否定することは出來ないであらう。

けれども今の時代には、追々この自分の郷土といふものを失ひかけてゐる人が多くなつてゐることも、亦明かな事實である。愛慕すべき郷土を失ふことは、同時に心靈の故郷を失ふことである。漁夫に取つて、海は單に生計の資を得るのみの場所と考

エマソン

Ralph Waldo
Emerson (1803-1882)

アメリカ
の哲學者
詩人

へられる時、漁夫は即ち心の故郷を失ふのである。農夫が山野・田畑を生活の爲の資を得る場所とのみ考へる時、彼等は心靈の郷土を失ふのである。

幾度も引合に出す言葉であるが、私にはどうもエマソンの自然論の左の一節は忘れがたい。

「樵夫の伐る一箇の材木と、詩人の見る樹木との間に區別を生ずる。私が今朝見た愛すべき風景は、疑もなく二十三十ほどの農圃から成立つてゐる。誰はこの畑を所有し、彼はかの畑を所有し、また某は向ふの森林地を所有してゐる。然し彼等の中誰一人もこの風景を所有するものはないのである。蓋し地平線の中には、あらゆる部分を全きものに統べて觀ることの出来る眼を持つた者の外には、何人も所有せぬ一つの財産がある。即ち、かくの如き人は詩人である。この財産こそ、是等三人の農

圃に於て最も優れたものであるが、彼等の所有證明書は、この財産に對しては何等の權利を與へぬのである。」

このエマソンの所謂二つの心を併せ持った人々が、最も幸福な農夫であり、樵夫であり、漁夫であり得ると私は思ふ。樹を材木として伐る樵夫は、同時に樹木を全き一つの物として眺め得る詩人であるのに、何の差間があらう。海をすなどりの場所とすると同時に、そこを心の郷土として愛することの出来る漁夫が、最も幸福な漁夫であるべきである。

郷土に定住して、さういつた幸福を見出だし得る人は、眞に郷土を有する人だとも云へる。私達にはさう云つた人々の生活が最も懐かしく思はれる。

自然は何といつても私達の心の故郷である。脚氣患者が郷里に歸ることによつて、何時となしに健康を恢復することが出

来るやうに、私達の傷ついた魂は、心の底から自然を愛し、自然に懐かしむことによつて、その健康を取りもどす事が出来る。

自然を魂の郷土として懐かしむことの出来る幸福を、私達は永遠に失ひたくない。私達は自分にも、また自分の子ども達にも、永遠に郷土の有する魅力を失はせたくない。それは私達のための搖籃であつて、また墳墓であるべきである。 (對山雜記)

一五 冬來たる

冬

貝原益軒

冬も來ぬれば、今朝より馴るゝ埋火のもと、やうく立ちはなれ難し。露と霜とおきかはし、紅葉色濃く、木々の梢、淺茅が原も冬枯の景色となり、面がはりするも、秋に異なる眺なり。神無月の時雨も過ぎて、日暖かなれば少し春ある心地す。むべこの月

貝原益軒
國學者
筑前の人
正徳四年癸
年八十五

木の葉ふり
冬の來て山もあ
らには木の葉ふ
り残る松さへ峯
にさびしき
(祝部成伸)

を小春とぞいへる。されど一の日二の日漸くかさなれば風氣
愈劇しく、木の葉ふりて山もあらはに見え残れる松も峯にさび
し。春夏秋の艶なる景色、よそほしかりつる有様、皆此の時に至
りて盡きぬれば、殊の外にも變れる空かなと、目驚かれぬ。



貝原益軒

日頃雪いみじう降りて、いかめしう積り
たる曉は、山も里も、ひたすら銀世界となり
て、世かはり景色ことなる有様なり。冬ど
もりせし梢の枯れたるも、再び花咲けるが
如し。殊更冬の夜のすめる月に、雪のひか
りあひたる空こそ、見る人なく獨り身に泌
みて、哀も深けれ。空晴れて後まで、友待つばかりところゝに
消残りたるはだれ雪も、いと心にくし。かゝる時、する業なく、た
だ袖くゝみしていらゝき居る人は、いとわびしげに見ゆ。或は

埋火にむかひ、文を巻きひろぐるを以て業とする人は、樂み深く
ぞありぬべき。凡ての事、年に先立ちて早く計るべし。若き時
勉めて文を讀習はば、かゝる時もわびしかるまじ。

冬の末つ方にも至りぬれば、今年の日數残り少く、こよみの軸
あらはるゝばかりにて、春の隣すてに近し。年の終るは惜しむ
べく、齡の重なるはうれはしけれど、新しき年を迎ふるは珍かに
て喜ぶべし。この頃は、世の中の人、何くれと忙しく、せきあへず、
多くのゝしりて走り惑ふをひとり靜かに見る人は、樂しむべし。
老の身は、月日もいとどたちやすく、何程もなき一とせなるを、數
へ添ふるも恨めし。されど人の世を経るは、思はずも變多き事
なるを、一とせの内禍なくて過ぎぬる人は、また樂しからずや。

(樂訓)

山家の雪

中島廣足

中島廣足
櫻岡と號す
國文學者
江戸の人
元治元年歿
年七十三

暮れわたる峯の松風吹きしきりて、いといたる寒きに、例の火桶かき抱き、麻衾^{マギ}ひきかづきつゝ、うち臥しをるに、軒のひまぐより吹きいるゝ風につれて、頭の上に何にかあらん、いと冷やかに散りくるは、雪降りいでたるにやと思ふほど、窓の戸にさとふゞきかくる音のいと烈しく、すゝろに心すごき夜のさまなるに、慣れに雪しすまひもたへがたう覺ゆ。
やうく風静まりて、下をれゆく竹の音をりく聞ゆるは、いかばかり積れるにかと心もとなきに窓の戸おし開き見れば、有明の月さし出でて、軒端の山も麓



の野邊も一つにうづもれたる、くまなき光の雪にはえて、えもいはずをかしきに、あはれ都の人にと思ふもかひなくなん。

〔模國文集〕

一六 浮島が原の對面

浮島が原
靜岡縣愛鷹山の
南麓
浮島沼附近の原
九郎御曹司
源九郎義經
兵衛佐
前右兵衛權佐源
賴朝
木曾
木曾冠者義仲
甲斐の殿ばら
武田信義及其
子信光など

九郎御曹司浮島が原に着き給ひ、兵衛佐殿の陣の前、三町ばかり引退いて陣を取り、しばらく息をぞ休められける。佐殿これを御覽じて、こゝに白旗白印にて清けなる武者五六十騎ばかり見えたるは、誰なるらん、覺束なし。信濃の人々は木曾に従ひて留りぬ。甲斐の殿原は二陣なり。いかなる人ぞ。假名、實名を尋ねて參れ。とて、堀彌太郎を御使にて遣はされ、家子、郎等數多引具して參る。間を隔てて彌太郎一騎進み出で申しけるは、こゝに白印にておはしまし候は、誰人にて渡らせ候ぞ。『假名、實名を

裾濃

鎧のをどしの色を上げ白く下ほど濃くばかしたものの

五枚兜

しころの五枚になつてゐる兜

大中黒の矢

箕の羽の羽の上下白く中ほどの黒い部分の廣いのて造つた矢

佐藤三郎

名は鐵信

鍬形

兜の庇の上に立つてゐる角の縁なもの

礎かに承り候へ。」と鎌倉殿の仰にて候。と申しければ、其の中に二十四五ばかりなる男の色白く尋常なるが、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧の裾金物うちたるを着、白星の五枚兜に鍬形打ちて猪頭に着、大中黒の矢負ひ、滋簾の弓持ちて、黒き馬の太く逞しきに乗りたるが、歩ませ出でて申されけるは、鎌倉殿もしろしめされて候。童名は牛若と申し候ひしが、近年奥州に下向仕り候うて居候ひつるが、御謀叛の由承り、夜を日に繼ぎて馳参じて候。見参に入れてたび候へ。」と仰せられければ、堀彌太郎、さては御兄弟にてまし、けりと馬より飛んで下り、御曹司の乳母子佐藤三郎をよび出して色代あり。彌太郎、一町ばかり馬を牽かせけり。かくて佐殿の御前に参り、此の由を申し上げければ、佐殿は善惡に騒がぬ人にておはしけるが、今度は殊の外嬉しげにて、さらば、是へおはしまし候へ。見参せん。」とのたまへば、彌太郎やがて参

同四郎

佐藤四郎忠信

伊勢三郎

名は義盛

り、御曹司に此の由を申す。御曹司、大きに悦び、急ぎ参り給ふ。

佐藤三郎同四郎伊勢三郎これら三騎召連れて参らる。

佐殿御陣と申すは、大幕百八十張ひきたりければ、その内は、八箇國の大名、小名並み居たり、

各、敷皮にてぞありける。佐

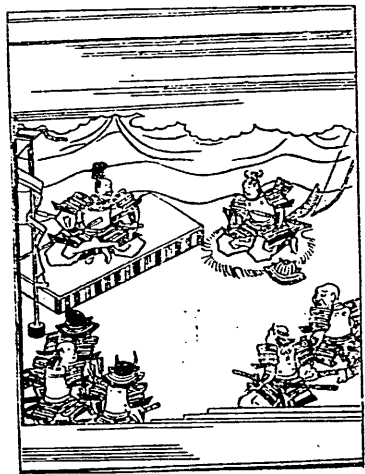
殿御座敷には、疊一疊敷きた

れども、佐殿も敷皮にぞおは

しける。御曹司、兜を脱ぎて

童に持たせ、弓取直し、幕のき

はに畏まりてぞおはしける。



面 對 の 原 が 島 浮

その時、佐殿敷皮を去り、我が身は疊にぞ直られける。「それへそれへ。」とぞ仰せらるゝ。暫く辭退して、敷皮にぞなほられける。佐殿は、御曹司をつくぐと御覽じて、先づ涙にぞ咽せられける。

頭の殿
左馬頭源義朝

池の尼

平忠盛の後妻

清盛の繼母

伊豆の配所

田方郡蛭ヶ島

伊東

伊東祐親

北條

北條時政

御曹司もそのいろは知らねども、共に涙に咽せ給ふ。互に心のゆく程泣きて後、佐殿涙を抑へて、さても頭の殿に後れ奉りて、その後、御行方を承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝、池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて伊東北條に守護せられ、心にまかせぬ身にて候ひし程に、奥州へ御下向のよしは、かすかに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと思召し忘れ候はて、取敢へず御上り候こと、申し盡くし難く悦び入り候。これ御覽候へ。かゝる大事をこそ思ひ企てて候へ。八箇國の人々を初として候へども、皆他人なれば、身の一大事を申し合はする人もなし、皆平家に相従ひたる人なれば、頼朝が弱けをまぼり給ふらんとと思へば、夜も夜すがら平家の事のみ思ひ、また或時は、平家の討手上せばやと思へども、身は一人なり、頼朝自身進み候へば、東國おぼつかなし、代官を上

八幡殿

八幡太郎義家

栗屋川

田川

盛岡市の西

刑部丞

新羅三郎源義光

せんとすれば、心安き兄弟もなし、他人を上せんとすれば、平家と一つになりて、却て東國をや攻めんと存する間、それも叶ひがたく、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿よみがへられ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。我等が祖先八幡殿の後三年の合戦にむなうの城を攻められしに、多勢皆滅されて無勢になりて、栗屋川のはたにおし下りて、幣帛を捧げて王城を伏拜み、南無八幡大菩薩御擁護をあらためず、今度の壽命を助けて本意を遂げさせ給べ。と祈誓せられければ、まことに八幡大菩薩の感應にやありてけん、都におはする御弟刑部丞は内裏に候ひけるが、俄かに内裏を紛れ出で、奥州の覺束なきとて、二百餘騎にて下られけり。路次にて勢打ちくはゝり、三千餘騎にて栗屋川に馳來て、八幡殿と一つになりて、終に奥州を従へ給ひける、その時の御心も、頼朝御邊を待ち参らせたる心に、いかでかまさるべき。今日より後

魚と水との如く
孤之有孔明
猶魚之有水
(蜀志)

山科
京都の東方
鞍馬
京都の北方にあ
る山寺
秀衡
陸奥出羽の押領
使鎮守府將軍藤
原秀衡

は、魚と水との如くにして、先祖の恥を雪ぎ、亡魂の憤を休めん。」と
宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司は、とかくの返事なく
して、袂をぞ絞られける。これを見て大名小名互の心の中推量
られて、みな袖をぞ濡されける。

暫くありて、御曹司申されけるは、仰の如く、幼少の時御目に懸
りて候ひけるやらん。配所へ御下りの後は、義經も山科に候ひ
しが、七歳の時鞍馬へ参り、十六まで形の如く學問を仕り、さては
京都に候ひしが、内々平家方便を作る由承り候間、奥州へ下向仕
りて、秀衡を頼み候ひつるが、御謀叛のよし承りて、取敢へず馳せ
まゐる。今は君を見奉り候へば、故頭の殿の御見参に入り候心
地してこそ候へ。命をば故頭の殿に参らせ候。身をば君に参
らする上は、いかゞ仰に従ひ参らせては候べき。」と申しも敢へず、
又涙を流し給ひけるこそ哀なれ。さてこそ、この御曹司を大將

軍にて上せ給ひけれ。

(義經記)

一七 狂歌と川柳

藤 村 作

狂歌は短歌と同じ三十一文字形式を用ひては居るが、俗語を
用ひ、また卑俗な内容をうたつたものであつて、和歌が傳統的な
感情にとらはれて居る時に、それらから離れて、近世の生活を背
景として歌はれ、古典や古人に對する皮肉や諷刺ともなり、近世
生活に對する陶醉ともなつたものが狂歌である。而して狂歌
の源流は、古今集に見えてゐる俳諧歌などにまでさかのぼ
る事が出来るのであつて、狂歌風の和歌は、それ以後の歌集にも
見えてゐるのであるが、所謂狂歌としての文學の注意すべき一
形式となつたのは天明頃である。作者としては、半井卜養や石
田未得を始として、四方赤良宿屋飯盛手柄岡持に於て全盛に達

し、北川眞顔等に至つては既にその勢力は衰へて來たと思はれるのであるが、それらの中で四方赤良は狂歌を代表する者であらう。

四方赤良はまた太田蜀山ともいふ。名は直次郎、寛延二年に



太田蜀山

生れた。十七歳の頃、父の業を繼いで御徒組となり、それ以來この業に従ひ、六十二歳で職を辭してからは、専ら狂歌の方面に身を入れたのであつて、文政八年七十七歳で歿した。彼の、事物を滑稽的に表はす技倆は驚くべきもので、時勢を觀て諷刺的によんだものをみても、その才は十分に窺はれる。それが少しも智巧的に考へられないやうに自然に表現されてゐる所に、彼の特質があり、また狂歌をす

べての意味に於てよく代表するといふことが言はれるであらう。

柄井川柳
江戸の人
川柳作者
寛政三年歿

狂歌とならんで、十七字を以て滑稽洒脫の想を表はさうとする所謂川柳が現れた。江戸淺草に柄井川柳といふ人があつて



太田蜀山の墓

前句附の宗匠であつたが、この新形式を始めたのである。

川柳は俳句と同じく十七音形式であるが、俗語を用ひ、また卑近な材料を捉へて人情の急所を表はさうとする。自然をとらへても、それを擬人化し、人間化してゐるのである。人事をうたふにも、英雄を凡人化するこ

情でなく、卑俗な世相をうつす事によつて民衆的な世界を表はしてゐるのである。
(國文學史總説)

一八 御 慶

改年の御慶めでたく天の戸を

明けましてよい春は來にけり

ほとゝぎす啼きつる後に呆れたる

後徳大寺のありあけの顔

世の中は何のへちまと思へども

ぶらりとしてはくらされもせず

歌よみは下手こそよけれ天地の

四方 赤 良

四方赤良
太田南畝又對山
人と號す
江戸の俳人
狂歌師
文政六年歿
年七十五

栗柯亭 木 端

栗柯亭木端
丸子氏
江戸の俳人
安永二年歿
宿屋飯盛
石川雅望
江戸の國學者
文政十三年歿
年七十八

宿 屋 飯 盛

動き出してはたまるものかは

唐 衣 橋 洲

菜もなき膳にあはれは知られけり

しぎやき茄子の秋の夕ぐれ

鯛 屋 貞 柳

富士の山夢に見るこそ果報なれ

路銀もいらす草臥もせず

つ む り 光

ほとゝぎす自由自在に聞く里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

馬 場 金 埴

雪ならばいくら酒手をねだられん

花のふゞきの志賀の山かど

馬場金埴
大阪屋甚兵衛
江戸の狂歌師
文化四年歿

鹿都部眞顔

北川嘉兵衛

江戸の狂歌師

文政十二年歿

年七十七

鹿都部眞顔

争はぬ風の柳の糸にこそ

朱 樂 菅 江

朱樂菅江

山崎登貢

幕府の士

寛政十年歿

やれく と潮のひるめし急ぐなり

青うなばらのへるにまかせて

川 柳

元日や昨日の鬼が禮に来る

清盛の醫者ははだかて脈を取り

武藏坊とかく支度に手間がとれ

義貞の勢はあさを踏みつぶし

手の甲へ餅をうけとる煤はらひ

能因

橋永愷

出家して能因法

師といふ

歌人

わらちくひ迄は能因氣がつかず

路問へば一度に動く田植笠

千客萬來皆來ると困るなり

幸田露伴

名は成行

文學者

文學博士

東京の人

一九 雪前雪後

幸 田 露 伴

雨も好し。露も好し。霰も霰も天より降るものの面白から

ぬは無きが中に、雪はまた特にめでたし。

降らんとして未だ降らず、灰色の雲の天空を蔽ひて風無き寒

さに雀ふくらむ程は兎もあれ角もあれ、そと下す風に連れて、ち

らくと降出づる始より、檐の玉水日に耀ふ光長閑に融けつく

す終まで、いづれかをかしからざらん。

まづ冬の雪の粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、檜の

葉に堅き音立て、板底にはいたく跳ね返りなどしつゝ、さら／＼と降りたる、見るに興あり、聞くにも面白し。又春の雪の大きく、軽らかに降りて、落つると頓て色なき水の昔に返る、淡々しさもなつかしく、消ゆる／＼も少しは積りて、茅葺の屋根に鹿子斑の



幸田露伴作

夏の富士を見せ、松梅樅などの梢には天華俄かに落ちかゝるかと思はしむるも趣あり。

されど降る最中の雪の見て美しきは、冬の末かけて春の初の頃、陽氣既に動きて陰氣猶いと盛なる時のことなり。寒さ甚だしからねば雪細かならず、暖かさ未だしければ雪は水めかずして恰も好く、且大きく且軽やかなるに、しかも一年の中最も降るべき折なれば、その罪々紛々として盛に下

るに當つては櫻花の春天に飄るが如く、蘆絮の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には、對岸を虚無に封じて仙境の縹緲を欺き、半衛の陋街には、連屋を瓊瑤に包んで蜃樓の巍峨を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺毳飄り零つる景色、見る眼もあやに美しき限なり。

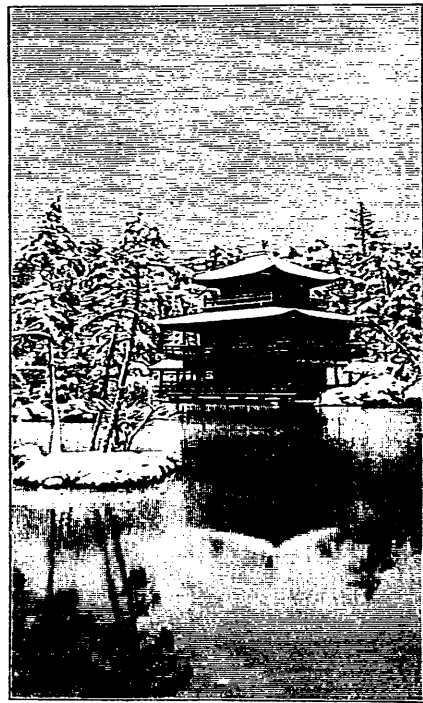
すべて降る時の眺には、廣きところより狭きところ好し。玉屑珠塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるものなれば、降りしきる眞中は、遠きは全く見えずして、廣きは却て狭くなり、近きは聊か霞みて、狭きは却て廣くなり、大川よりは山間の溪、廣野よりは市中の園よろし。

霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひ盡くして、鏡新に明かなる空の蒼々と朗かなるが下に、渣滓鍊り去つて銀曇なき地の皎々と白きが、見る眼もはゆく遙かに開けたる、常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の取りどころ無きだ

馬をさへ
馬をさへ眺むる
雪のあしたかな
(芭蕉)

に、面白く思はる。「馬をさへ眺むる」と人の云ひたる旦朝日の光
いと花やかなるに疎林に禽起つて飛んで又還る、有りふれたる
郊外の様ながらもよし。

梅尾、榎尾
共に京都市右京
区にある山、高
尾と合せて三尾
といふ、紅葉の
名所である
木曾寢覺の床
長野縣福島町の
南方



金剛寺の雪景

の巖は鬼斧に任せて千古冷やかに峙ち、潭は藍靛を湛へて一脈
徐ろに流るゝ雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋梢重く、壁の簪を戴

西の京は金
閣銀閣眞如堂
岡崎東山清水
皆盡とすべし
梅尾榎尾は見
ねば知らぬぞ
口惜しき。木
曾の寢覺の床

ける松の村立のあたり、姿をも見せて、名をも知らぬ山の禽の餓
を鳴きたるなど、十二年の昔の、今の
余の胸に猶鮮やかなり。

冬の不忍池



東の京は御溝の水おだやかに、浮寢
の禽の夢も安けく、雪に閑かなる大御
代の午、また比無くめでたし。山王臺
今猶好からんが、溜池の有りし昔、いた
づらになつかし。不忍の池、一望千頃
の景はいはずもあれ、石橋のさゝやか
なるを渡つて湖心に至らんとすれば、
敗荷の残莖に一撮の白きものを見た
る、これも捨て難き風情あり。暮れて猶暮れ難き雪の闇夜に、何
をか物言ふ鴨のさゝめきを聞きたる、水に色無く、聲に白さあり

山王臺
麹町區にあり
溜池
山王臺の東南麓

待乳山
隅田川の右岸

相生橋

深川區越中島より
京橋區新島
にかゝれる橋

中島

越中島の一名

とや云ふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の碧、四方の白、實に武藏野を分きて流るゝ川なりといふべし。相生橋の橋長く、中島の島小なる、取出でて言ふべきにはあらねども、南に涯無き海をすかして、海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ、樹立の鷺を宿したるに劃りて、一幅の畫としたる、欣ぶべく賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。

(洗心廣録)

二〇 智恵は小出しにすべし 福澤諭吉

智恵は小出しにすべしとは古人の金言にして、大造な智恵を一時に現して天下を驚かさんとするよりも、朝に夕に物に觸れ、事に當り、遲滞なく之を處理して、颯々と世を渡るべし。鼠捕る猫は爪を隠すといふ。隠すは宜けれども、生涯隠して鼠を捕ら

福澤諭吉

教育家

明治思想の先登

康應義塾の創立

大分縣中津の人

明治三十四年歿

年六十八

ざるは爪なきに等し。世間の後進生が、動もすれば英雄豪傑を氣取りて、人事に頓着せず、愚鈍と言はるるも迂濶と評せらるるも馬耳東風にして、高く自ら構へ、この事は拙者の本領に非ず、其の業は自分の柄に相應せずとて、勝手次第に好き嫌ひする其の有様は病身なる貴公子が、飲食の物を選ぶの情に異ならず。

蓋し後進生は胸中に智恵の大いなるものを藏めて、容易に之を用ひず、用ふれば則ち大いに用ひて、大いに事を爲すの了簡ならんなれども、如何にせん、事は來りて人を求めず、我より進んで事を求むるに非ざれば、遂に之に逢ふことなかるべし。鼠を捕らんと欲せば、猫より進むべし。鼠より來りて猫に觸れたる例を聞かず。啻に鼠を求むるのみならず、蜻蛉にても、蟬にても、見當り次第に飛び掛りて、平生の技倆を現はすこそ猫の本分なれ。猫の爪決して隠すべからず。捕物の大小に論なく、苟も技倆を

試みるの機會あらんには、之を空しうせずして功名を現はすべし。之を評して爪の小出しといふも可なり。在昔豊太閤が木下藤吉の時より次第々々に立身したるは、豊公の大智を持ちながら、初めは草履取、次で炭薪奉行、又次で普請奉行等次第々々に其の智恵を小出しにして甲斐々々しく事を辨じ、漸くにして大名に立身すれば、大名の智恵を出し、遂に天下を掌握すれば、平天下の智恵を出したればなり。若しも當時の木下藤吉が、武家奉公の初めより、英雄豪傑を氣取りて、草履取は拙者の本領に非ず、炭薪奉行は吾身の柄に相應せずと力みたらば、遂に天下も手に入らざりしことならん。太閤畢生の大業は智恵の小出しに成るものといふべし。

(修養全集)

松本亦太郎
心理學者
文學博士
東京帝國大學教
授
群馬縣の人

二 自然と色彩

松本亦太郎

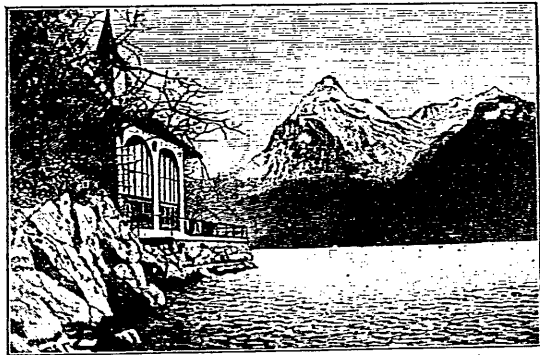
自然界に現れる色彩は千差萬別であるが、これに對する心持の方から見ると、全色彩をまづ二つに大別することが出来る。即ち溫暖の心持を生ずる色彩と、寒冷の心持を生ずる色彩とである。寒冷色の中心は青であつて、青に近似の色は青緑から紺青に至るまで、皆涼しい感じを與へる。溫暖色の中心は橙黄であつて、これに近似の色は暗赤色から黄緑に至るまで、皆暖かな感じを與へる。

日本やイタリゝあたりでは、晴天には大空は青々として眞に美しい。然るに、いづれの國民もこのやうな青々とした空を戴いてゐるといふわけにはゆかない。北歐諸國では、晴れてゐる時でも、空氣が透明でなく、空は灰色になつてゐる。勿論多少の青みはあるが、氾々とした青色ではなく、鉛のやうな色をしてゐる。随つて晝でも夜でも天體の光が朦朧としてゐる。我

我日本人はイタリーの風色をあまり美しいとは思はないけれども、北歐の人がイタリーの自然を讚美してやまないのは、彼等は青天白日の美を日常見ることが稀だからである。空の青く見えるのは、空氣の中を日光が透るためである。遠山の青いのも、重疊した空氣を透して山を見るためである。大空の色は飽和の度の強い青ではない。濃い青を日光をもつて薄くしたのだ。あの淡青、即ち空色は靜かな色だが、喜悅の色である。

最も濃い青は深い海の表面においてこれを見ることが出来る。それは即ち紺青である。太平洋上、或は印度洋上の航海は、紺青の波の上を渡つて行くのであるが、極めて濃厚な紺青は、その深さ一萬七八千呎もある大西洋の水面において、これを發見することが出来る。紺青の水より雪白の波の花の咲くのも不思議であるが、咲いた花は忽ちに紺青に染められ、雪白と紺青と

ルツェルン湖
Lucern

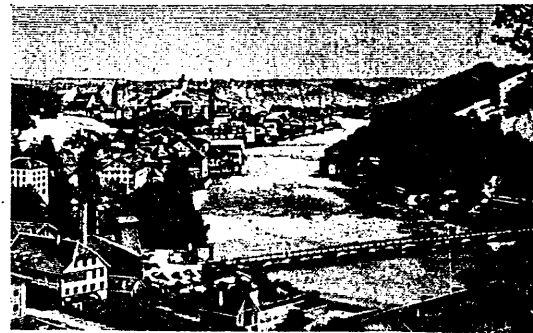


湖ンルエツル

の争は限もなく繰返されて、二つの色彩の活躍する狀は、甚だ目覺しく、航海中の一の慰めである。紺青はいかにも美しいけれど、沈鬱で、一種の妻みがある。

ギリシヤの内海や、イタリーの沿岸の水のやうに、海が淺くなれば、紺青はやゝ淡くなつて、瑠璃の寶玉を液化したやうに爽快になり、更にスキスの山間ルツェルンの湖水となれば、藍青は綠を帯びて、あたかも翡翠の玉を水に化したやうになり、色は靜かであるが、沈鬱の趣は淡くなる。ライン川の上流などになると、綠色はますます勝つて、青色を壓する。

尤も、河の水は礦物性或は植物性の溶解物があつて種々に着色せられるけれど、概して水は深きより浅きに移るに随ひ、紺青より青を経て緑に移るのである。人間は眼界が狭く、一局部のものしか見ない。しかもその局部には種々な色が現れてゐるが、地球の表面の大部分を形成してゐる水の色が青であり、そしてまた天空の色が青であるのだから、天地の色は青が主調になつてゐるといはなければならない。空の見える所、水の動く所、人間の心を沈静させる働が絶えず行はれてゐる。花の中にも、あやめ、紫陽花、野生の朝顔など、いづれも涼しく、靜かに人の心



流土の河ニイラ

を休息させる色である。

寒冷色の青と正反對なのは橙黄色である。これは暖かい色であるとともに、人の心を大いに發揚させる。太陽から發射する光は最も光輝ある橙黄色である。秋の夕陽が西山に沒せんとする際の空の色は、太陽から出る黄金色の本性を最もよく發揮する。例へば、東海道で見る富士の背後に日の沒する際や、京都の愛宕山の後ろに日の入らうとする時の空は、全く金箔の空と化し、山嶽の碧色と相對比して、その見榮えが一層である。私の心に最も強い印象を残したのは、紅海の上から眺めたシナイ山の夕陽の景色であつた。シナイ山が絶頂から黄金の光を浴び、山の中腹にかゝつた雲は、黄金の神火が燃えるやうに見え、莊嚴いはん方なく、炎の中にエホバの聲が聞えたとか、暗中に火の柱が立つて、イスラエルの民の沙漠旅行を先導したとかいふや

シナイ山
アラビアの
シナイ半島
にあり
Mt. Sinai
エホバ
ヘブライ人
の神
Jehovah
イスラエル
の神
Israel
をいふ

アポロ
ギリシャ
ローマの神
話に出てく
る藝術の神

なユダヤの神話は、あゝいふ景色から湧出したのではあるまいかと想はれた。太陽の光線も日本ではさまで強烈ではないが、ギリシャのアテネ附近の夏の太陽といつたら朝からえらい光輝を放つて、その光が大理石質の地面に反射する時は、眼が痛みを覚え、煤色の眼鏡を掛けずにアテネ附近を旅行するのは眼のため危険であるといはれてゐるくらいである。「ギリシャ神話」で、太陽の光線をアポロの射た矢であるとしたのもなるほどと合點せられる。

太陽の光が月や星に反映する時は、よほど趣の違つた色が出る。太陽は吾人の眼に映ずる限においては、熱烈な黄金色となるが、月に映じた時はやはらかく、幾分冷やかな色になる。地平を出る時の月は、空氣の汚濁してゐるため銅色を帯びてゐるが、だん／＼高くなつて、澄みわたつた空氣を透かして月を見ると、

空氣の青色が加つて來るために、月は黄金に銀を混じたやうに、やゝ蒼白になり、冷靜の趣を生じ、人をして沈思せしめる。天體、天象の色としての黄金色は、その發顯の規模が大きく、種々人の心を躍動せしめるのであるが、小規模においては、地上の花鳥の色となり、人を樂しませる。冬の蜜柑、爛春の菜種、爛は、何人が眺めても喜悅を感じる。その他、連翹、山吹、月見草、黄菊、水仙の類、四季の花として、いづれも優しい、懐かしい趣がある。南瓜、胡瓜の花は、胡蝶の舞ふ姿と共に、野趣があつておもしろい。

紺青と橙黄との中間に位してゐるのが、綠色及びそれに近似の色である。綠色は寒暄相和し、興奮沈靜相合し、いはゆる折衷的な性質を有する色である。地上における非情の生物の有する特色であつて、天にはない色である。人間がいつまで眺めてゐても飽きない色は綠である。若草や若葉は大抵帶黄綠色で

始まるが、日を経るに随ひ、緑色となり、終に暗緑色となる。フランスあたりでは、夏の盛でも木の葉は帶黄緑色で、やはらかく、うひうひしいが、日本や英國では、木の葉は忽ち暗緑色となり、自然の景色が硬くなる。

若葉の萌出る時は、まことに美しい。氣が伸びくする。五月初の若葉の景色は、四月初の花の景色よりも、實は遙かに趣が深い。東臺の新緑、京都東山の新緑、宇治の新緑、嵐峽の新緑を訪うて、楽しむ人の割合に少いのは、花見客の多數が、自然の風色を楽しみ、心をもつてゐないことを示してゐる。眞に花の色を楽しむ人なら、新緑にも樹下に大騒をしてよいはずである。佛獨あたりでは、花に對してあまり騒がないが、森林の色を楽しむことは随分盛である。パリの公園の初夏の滴るやうな新緑が、都人士の心をひきつけることは、實に大なるものである。また英

東臺
東京の上野の山

國や米國では面積の廣大な芝生をつくることに實に巧で、その國民が綠色趣味に富んでゐることをよく示してゐる。

(渡り鳥日記)

二 建國の精神

永田 秀次郎

永田秀次郎
貴族院議員
東京市長
兵庫縣淡路の人

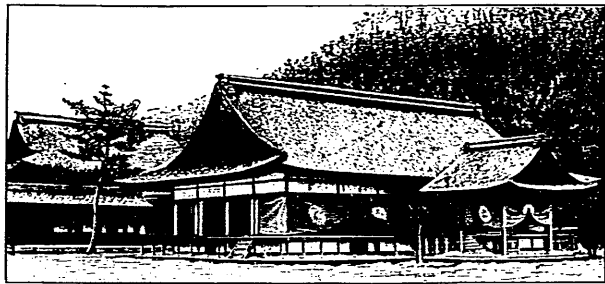
我が建國の精神は實に高明なる精神である。是を現代に適用して少しも差支の無い精神である。是を世界に推弘めて少しも不都合の無い精神である。

我々の國民性は、君國の爲には水火を辭しない、燃ゆるが如き愛國の熱情を持つてゐる。併しながら、其の本體は先天的に平和を好み、天然を愛し、階級的の觀念極めて薄く、衆と共に楽しむ事を好む所に在る。

此の國民性は神代の昔の神話にも既に表はれて居る。天祖

素盞鳴尊
伊弉諾、伊弉册
命の御子天照大
神の御弟

大國主命
素盞鳴尊の御子



橿原神社宮

天照大神は言ふ迄もなく女神である。光明を垂れ、平和を愛し給ふ女神である。素盞鳴尊が亂暴をなされた時も、天岩戸に隠れて争をお避けになつた程に平和を好み給ふ女神である。しかも八百萬の神は、其の御徳を慕つて、何の疑もなく歸依渴仰されたのである。是は我々の祖先が平和を好み、勇武よりは明德を尙んだことを示すものである。又天孫降臨に先だつて出雲の大國主命が歸順して何の戦争も無かつたことも、大義名分の前には、何人も之に反抗しないと云ふ理想を示すものである。我が國民性は第

一に平和を愛し、大義名分を重んずるものである。而して是が即ち高明なる我が建國の精神を語るものであると言はねばならぬ。

北畠親房
吉野朝廷の忠臣
從一位准三后
正平九年歿
年六十三
神皇正統記
北畠親房著

第二に、三種の神器に關して我が國民性を考へて見たい。北畠親房は神皇正統記に於て「鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照らすに、是非善惡の姿現れずと云ふ事なし。其の姿に隨ひて感應するを徳とす、是正直の本源なり。玉は柔和善順を徳とす、慈悲の本源なり。劔は剛利決斷を徳とす、智慧の本源なり。此の三徳を合はせ受けずしては天下の治らんこと洵に難かるべし」と解説してゐる。即ち鏡は正直を意味し、玉は慈悲を意味し、劔は決斷を意味すと云ふのである。殊に鏡を以て第一位に置かれた事は、我が國民道德の高明なる理想を語るものと言はねばならぬ。若し單に尙武を以て立國の要義とする

五箇條御誓文
「廣く會議ヲ興シ
萬機公論ニ決ス
ヘシ」

ならば劍を第一位に置くべきである。此の點から考へても、我が國民性は、正義を愛し、平和を好むものであつて、我が國民は決して好戰國民にあらざる事を知るに足ると思ふ。

次に我が神話には萬機公論に決すべしと云ふ理想が明瞭に表はれて居る。則ち大事件のある毎に、八百萬の神々が天の安の河原に神集ひに集ひ、神謀りに謀り給ひ、衆議に依つて事を決せられた。例へば、天照大御神が天岩戸に入らせられた時に、八百萬の神々が天の安の河原に集つて評議をして、思兼神の智謀によつて舞樂を奏したのである。聖德太子の憲法にも、更に又明治維新の五箇條の御誓文中にも、凡て皆神代の理想が表はれてゐる。此の如く萬衆皆相融和して何の私心なく専横なく、全く文字通りに萬機公論に決すると言ふ公明なる心事は、即ち我が國民の萬年に亘つて規範とすべき教訓である。所謂君民同

治の意義が此の間に明かにされて居るのである。

尙神話に見える重大なる理想は、君幹臣枝の理想である。我が祖先は第一に此の地球を生まれたのである。そして我々は天祖の直系を本家とし、君とし、天祖の傍系を分家とし、臣として繁榮したのである。故に我々君臣の關係は征服されたのではない、繁榮して來たのである。切つても切れぬ血族の關係である。故に大義名分が餘りに明かに定まつて居て、直系が皇位に即かれるといふ事は、太陽が東から出るといふが如くに自然であつて疑問を超越して居るのである。茲に我々君臣間の親愛がある。茲に我々臣民の自尊心がある。天皇の尊嚴は我々の自身の尊嚴である。故に我々臣民は皇室の外はすべて平等である。我々の社會的地位は貴賤貧富の差別があると言つても、均しく是、高皇產靈神の子孫である。下等動物でもなければ、上

高皇產靈神
天御中主神、神
皇產靈神と共に
造化三神の一

等動物でもない、凡て平等である。

之を約言すれば、我が建國の精神は、第一に平和を好愛する高明なる心事を理想とし、第二に萬機公論に決するの理想、第三に君臣同治、四民平等を理想としてゐる。凡そ是等の理想は所謂之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らざるものであつて、我々は此の精神を時代に適應して運用して行かなければならぬのである。

（建國の精神に還れ）

二三 鎮西八郎爲朝

鎮西八郎
源爲朝
爲義の第八子
新院
崇徳天皇
左府
左大臣藤原賴長
大炊御門
郁芳門のこと

新院は齊院の御所より北殿へ遷らせ給ふ。左府は車にて参り給ふ。白河殿より北河原より東春日の末にありければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に東西に門二つあり。東の門

父子五人

忠正と其の子長盛・忠綱・正綱・通正

父子六人

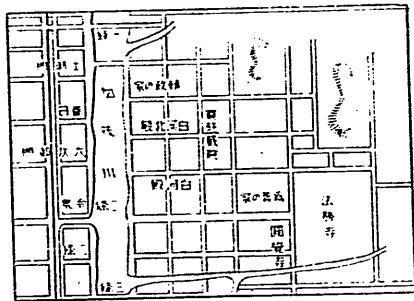
爲義と其の子頼賢・頼仲・爲宗・爲成・爲仲

義朝
爲義の長子

をば平馬助忠正承つて、父子五人並に多田藏人大夫頼憲都合二百餘騎にて固めたり。西の門をは六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり。其の勢百騎計りには過ぎざりけり。是こそ

猛勢なるべきが嫡子義朝に附いて多分は内裏へ参りけり。

家弘
平氏
鎮西
九州のこと



白河殿附近の圖

をぞ固めさせける。北の春日表の門をば、左衛門大夫家弘承つて、子供具して固めたり。其の勢百五十騎とぞ聞えし。

樊哈
漢高祖の臣
勇士
張良
漢高祖の智謀の
臣
吳起・孫臏共に
支那時代の兵法
家
養由
楚人。弓術の達
人

爲朝は器量人に超え、心飽くまで剛にして、大力の強弓矢つき早の手柄きなり。弓手の肘、馬手に四寸延びて、矢束を引くこと世に超えたり。紺地に色々の絲を以て、獅子の丸を縫うたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て威したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞆入れ、五人張りの弓、長さ七尺五寸にて、鉤打つたるに、三十六さしたる黒羽の矢、負ひ、兜をば郎黨に持たせて、歩み出でたる體、樊哈も斯くやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良に劣らざれば、堅き陣を破ること、吳子・孫子が難しとする處を得、弓は養由にも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始めまるらせて、あらゆる人々、晉に聞ゆる爲朝見んとて、舉り給ふ。

左府すなはち合戰の趣計らひ申せ。と宣ひければ、畏まつて、爲

高松殿
後白河天皇の御
所、假の内裏

掌を反す
説苑變ノ所欲
爲、易ニ於反ヲ掌

朝久しく、鎮西に居住仕つて、九國の者共従へ候について、大小の合戰數を知らず、中にも折角の合戰二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて強陣を破り、或は城を攻めて敵を亡すにも、皆利を得ること、夜討に若くこと侍らず。然れば、只今高松殿に押寄せ、三方に火を掛け、一方にて支へ候はんに、火を遁れん者は、矢を免るべからず。矢を恐れんものは、火を遁るべからず。主上の御方心にくゝも候はず。但し兄にて候義朝などこそ、駈出でんずらめ。それも眞中指して射通し候ひなん。まして清盛などがへろへろ矢、何程の事か候べき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散らして捨てなん。行幸他所へ成らば、御赦されを蒙つて、御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も御輿を捨てて逃去り候はんずらん。其の時爲朝参り向かひ、行幸を此の御所へ成し奉り、君を御位に即け参らせんこと、掌を反す如くに候べし。主上を迎へ参らせん

こと、爲朝矢二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に、勝負を決せん條、何の疑か候べき。」と憚る所もなく申したりければ、左府、爲朝が申すやう、以ての外、の荒儀なり。歳の若きが致す所か。夜討などいふこと、汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。さすが天下わけ目の大戦に、源平數を盡くして兩方に在つて勝負を決せんに、無下に然るべからず。その上、南都の衆徒を召さるゝことあり。興福寺の信實、玄實等、吉野・十津川の指矢三町、遠矢八町といふ者共を召具して、千餘騎にて參るが、今夜は宇治に着き、富家殿の見參に入り、曉これへ參るべし。彼等を待調へて、合戦をば致すべし。又明日、院司の公卿殿上人を催さん、に、參らざるもの共をば死罪に行ふべし。首を刎ぬること兩三人に及ばば、残りなどはか參らざるべき。」と仰せられければ、爲朝上には承服申して、御前を罷り立ちてつぶやきけるは、和漢の先

興福寺
奈良にある
信實
源賴安の子
玄實は信實の子
十津川
大和國吉野郡にある十津川郷をいふ
富家殿
頼長の父藤原忠實

蹤朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば、合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計らひ、如何あらん。義朝は武略の奥義を究めたる者なれば、定めて今夜寄せんとぞ仕り候らん。明日までも延びばこそ、吉野法師も奈良大衆も入るべけれど、只今押寄せて風上に火を掛けたらんには、戦ふともいかでか利あらんや。敵勝つに乗るほどならば誰か一人安穩なるべき。口惜しきことかな。」とぞ申しける。

(保元物語)

二四 世界の歌枕

上 田 敏

大西洋の浪は、太平洋のとは稍違つてゐる。太平洋の浪は大きく緩く打つ。大西洋のはいつも天氣が悪い爲か、稍小さく鋭い。空の色の關係もあらう、其の色は澄んだ藍ではなくて、稍黒

上田敏
號は柳村
英文學者
文學博士
京都帝國大學教授
大正五年歿
年四十三

ずんだ、時としては鉛のやうな色に見える。大西洋も緯度が稍高くなるに随つて、浪の色が淡く、入日の華やかさは異ならぬが、夕雲の色彩も稍あつさりとして、南海の絢爛な色よりも却て美しい。

私の大浪に遭つたのは、桑港に着く三日程前の一日であつた。小山の如き浪が寄せ返るので、さしもの大船も木の葉のやうに動搖したが、幸にも此の日はすこぶる上天氣で、風も無かつたので、甲板の上で其の壯觀を味はふ事が出来た。大西洋の方は、一體に山なす巨浪は少いが、米國を去つて六日目ぐらゐに、暴風雨に類した天氣に出遭つて、ひどく苦しめられた。要するに、海の景色は取出でて人に語ることは難いが、後日に追想すると、單調のやうでも、其の美は千變萬化である。これ實に究竟の歌枕である。

桑港
San Francisco
サンフランシスコ
米國太平洋岸の港

布哇
Hawaii
太平洋北部の群島

金門灣
Golden Gate
桑港の前にある湾

陸上の景色は、土地に由つて著しい相違があつて、一般には言盡されぬ。布哇の如き、四時氣候を同じうして太平洋の樂園と稱せられる地に行くと、満目の風光一變して、始めての人には非常に面白い。遠淺の海が極めて澄んだ萌黄の色に見えて、それに椰子の林が背景にあしらはれてゐる風情は、繪畫で見るよりも實際の方がよほど美しい。これからの人が、歌枕の一つとすべき處だと思ふ。カピオラニの公園に遊んだ時、蔚然たる榕樹の下に放し飼の孔雀が止つてゐて、その艶な羽毛が花の樣であつたのを記憶する。又桑港の港近くなつた海上、數百羽の鷗が船に沿うて舞つてゐる處から遙かに眺めると、金門灣頭の大浪が港口に押寄せる有様は、水の屏風を立て廻したごとく、海の上にも瀧があるかと疑はれた。これまた歌枕に逸すべからざるものと思ふ。

熱帶地方は言ふ迄も無いが、歐米の風光は、日本に比していたく趣を異にしてゐる。彼の國には、我が國よりも草木が少い。見る山も見る山も、日本のやうには松杉が山全體を蔽うてゐない。或は芝山の如く、或はたゞ岩石のみのやうな山の處々に、たま／＼青々した草木が十數本繁つてゐるといふ風の景色が多い。それで日本人は、動もすれば我が國の景に草木の多いのを誇稱するが、それは稍偏した見方であつて、兩方共にそれ／＼の美しさがある。併しながら、その土地の極めて確であるのは、勿論景色が好いとは言はれない。私の通過した米國の一部分は、殊に冬枯の候であつたから、人げのない、ものさびしい廣漠の野を行く心地がした。概して、あちらの木はひねくれてゐない。皆すうつと直立して、地面を離れた數尺の處から、四方に向かつて枝が規則正しく手をひろげてゐる。かう規則正しくなつて

ワイオミング
米國の西部
にある州の
名

ソルト・レーク
同國の北部
ユタ州にあ
る湖

コロラド
米國の西部
にある州の
名

キャニオン
コロラド河
の峡谷

ゐる枝振は、いかにも風趣が乏しいやうに思はれるが、實際はさうでない。

さてアメリカの歌枕を挙げれば、まづワイオミングの平原であらう。眼の届くかぎり一物もなく、雪がち／＼降つてゐる中を、たまに羊の群が鐵道線路のあたりをさまよふなどは、優美の觀には缺けてゐるが一種壯大の趣がある。名にし負ふソルト・レークの鹽の湖を中斷する中央太平洋鐵道の長路を通ると、平原の間に丘陵が起伏して、雪斑の岩角に朝日の反射する景色、これ亦十分に歌枕たるの價值がある。又コロラドの北所謂キャニヨンの一部は、奇岩怪石が路傍に轉がつて、さながらの鬼斧神工と思はれる。此の景も歌枕に逸すべからざるものである。さて此の歌枕といふ詞は、もう少し意味を廣くして見たいと思ふ。即ち山水の風景ばかりに止めず、進んで紅塵萬丈の市街

ニューヨーク
米國ニ
州の
大都會
New York
ブルックリン
ニューヨーク市の一部
Brooklyn
ホバーク
ハドソン河を隔ててニューヨーク市と相望む
Hoboken
マヂソン
ニューヨークのマヂソン公園に接した大通
Madison
バレルオルガン
手風琴
Barrelorgan
ウォールストリート
Wallstreet
ニューヨークランド
New-England
米國の東部地方



煤煙の立昇る工場の光景なども詩歌に寫し出して面白いと思ふ。例へば、ニューヨークの摩天閣なども其の或物は建築美を持つて居ないが中には一種の新しい趣味の徹底して居るものがある。ブルックリンの釣橋の上からニューヨークを望むと、天建て列ねた大厦高樓が雲に聳えて殊に薄暮は二十階三十階の窓の燈が空の星かときらめいて輝く。又ホバークの港口など朝霞の景色、夕暮の色、他國に無い趣味がある。更に進んで人情風俗を加へて景色を見ると、愈々好箇の歌枕がある。

ニューヨークはマヂソンの大通、世界の富を集めた繁華な場所に立つて、イタリヤの移民が弾く哀なバレルオルガンの聲を聞くと、聲こそは細けれ、近代文明の弊害を呪ふ切實の音楽かとも聞える。またウォールストリートの執務時間に其の邊を通ると、黄金の爲に萬人が血眼になつて狂ひ廻つてゐる有様は、如何にもあさましい感じがする。またこれとは反對に、冬の田舎に入つて見ると、葉の落盡くした楓樹の並木路を、雪を蹴て小學生徒の走つて行くなど、若き米國萬歳の聲を發したい位である。ニューヨークランドの田舎の景色は、落着いて若々しい。如何にも懐かしい感を與へる。

歐米の大都會中、どこが好いといはれたなら、誰も賞めるのはバリであらう。市街の美觀、道路の整頓は言ふに及ばず、氣候は溫和、風光は佳麗、風俗は優雅、かういふ處に住んで詩でも詠

シャンゼリゼー

Champs Elysees

長安 陝西省西安府

セーヌ

Seine パリ市中を流れる川

ノートルダム寺

Notredame パリにある

ゴシック式

Gothic architecture

んでゐたいとは誰も望む所かと思ふ。シャンゼリゼーの大通は、實は盛唐の長安もものかは端麗高雅、世界第一である。歌枕はどこにもごろ／＼してゐる。文明の最高に位するのはフランスである、而してパリである。あくまで華美を極めた町の中にも、何處となく超脱した趣がある。車馬絡繹たるセーヌの河岸に、悠然綸を垂れる隠君子もある。橋の下には、大の髪結床がある。河岸の石垣の上にはお馴染の古本屋がある。有名なノートルダム寺の建築はゴシック式の標本で、朝夕の色の變化が著しい。嘗てノートルダムすべての變化を味はうと、一日一晚の間眺め暮した事もあつた。その最も美觀を極めるのは夕方の景色で、さながら黄金の光を浴びたやう。また夜のしらしらとあけて、朝風の心地よく頬を拂ふ時、之を望むのも好い。眞珠の色を曇らせた様な色から薔薇色のはてやかなのに至る

シャルロット

Charlotte

ベルシロン

Perolieron

ターナー

Turner 英國の風景畫家

テムズ

R. Thames ロンドン市を貫流する河

リッチモンド

Richmond 英國ヨーク州の古城市

ナポリ

Napoli イタリア南部の都府

までの色合の微かな匂を味はふことが出来る。其の外、花賣る老嫗の風、シャルロットの帽子を被つて、ボールの箱を抱へた店通ひの賣子の姿、ベルシロンといふ牛よりも大きい馬を牽く馬丁の振夜半近く芝居のはねた後に、雨が降つて幾千の街燈の光が敷石に映る所、自動車か唸り馬車が軋る不夜城の壯觀満目の時、勢、皆歌枕ならぬはない。

ロンドンには佳景の地とは誰も認めないが、その色彩の變化、色合の豊かな點は、ターナーの繪にある通りで、頗る味はふ價值がある。併し同じく風光を味はふにしても、住心地よいパリの方が、あらゆる旅客の稱揚する所だと思ふ。たゞロンドンにもテムズ上流のリッチモンド邊からの兩岸の風景には、英國特有の美觀が現れてゐる。此の他、風車、朱い屋根、清い淀に名あるオランダもよく、イタリアではナポリ邊の夢のやうな景色もよい。

ザルツブルヒ

Salzburg

イギリス海峡

English Channel

紅海

アラビヤと
アフリカと
の間にある
海

Red Sea

スウィスは風光明媚と稱せられる國で、誰も皆嘆賞するが、私は寧ろ南ドイツを採る。南ドイツのザルツブルヒの景は日本によく似てゐる。要するに、何處の風光が一番すぐれてゐるかといふ問題には、一概に答へ難い。見る人々の心によつて、如何なる地如何なる處と雖も、皆相當の美は味はれるものである。浪の激しいイギリス海峡の船の上でも、暑さ堪へ難い紅海航行の甲板でも、見る心によつてそれらの美が感ぜられる。元來歌枕などと取出してきめるのは、或は間違つてゐはしまいか。天下皆歌枕ではあるまいか。

(心の花)

二五 讀書の選擇

佐々醒雪

エマーソンはいく、書を讀まば最も適當なるもののみを讀むべし。さらぬ群書の涉獵に記憶力を徒費することなかれ。と。

佐々醒雪

名は政一
國文學者
文學博士
東京高等師範學
校教授
大正六年没
年四十六

エマーソン

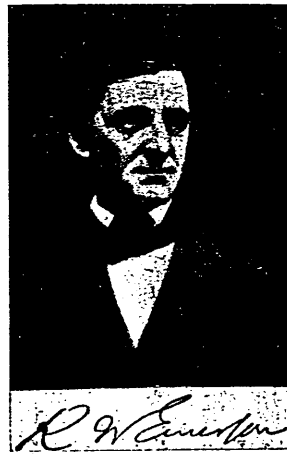
Ralph Waldo Emerson
アメリカ合衆國の詩人哲學者

かの新聞雜誌と拙劣なる小説とのみを愛讀するものは、エマーソンのいへる、劣等なる群書に記憶力を徒費するものなり。否彼等にして、かゝる劣等なる書籍の耽讀に歲月を涉りて、毫も良好なる書籍に趣味を覺むることを勉めずんば、それは實に時間と記憶力との徒費のみにあらじ。かゝる讀書は注意力を薄弱ならしめ、思想の清新を絶ち、氣象の煥發を妨げ、人をして神僞氣阻みて、頽然として生氣なきに至らしむべし。

これを覺醒せんとするには、いかにすべき。エマーソンまた教へていはく、讀書の最良法は、かの時間と紙とによりて製作せられたるものを措いて、直ちに天然を讀むにあり。と。然り誠に汝の趣味の睡眠を自覺せば、暫くその新聞雜誌と小説とを棄て、名山大川の間に直ちに秀麗なる天然の文學に接せよ。親しく偉大なる審美の靈光に浴せよ。庶幾はくは、汝が趣味を覺醒

せしむることを得んか。

偉大なる文學は偉大なる天然に近し。天然の爲すところは、天才の筆亦よくこれを爲すことを得べし。名篇大作に親炙するは、恰も名山大川の間に逍遙するに似たり。されば善良なる



署名のそとンローマエ

讀書は、よく眠れる趣味識を警醒し、よくこれを啓發し、助長し、清新なる思想、靈妙なる筆力を涵養するものなりとせば、予は目下の讀書界を警醒し指導すべき唯一の急務は、これに讀書の選擇を教ふるにありと信ぜんとす。

苟も書を讀まんとせば、成るべく優等なるものを選ぶべきこと勿論なり。されども、最も優等なる書即ち第一流の書は、天下

源語

源氏物語

平安朝時代の小説

紫式部作

近松

近松門左衛門

浮城堀作者

大阪に住す

享保九年歿

そも、幾何かある。今單に日本の文學書についていはば萬

葉の一部と源語と近松の作と、その他なほ強ひて二三を數ふる

を得んも、一國の文學界の讀書をこの僅少なる書冊に限らんこ

とは、殆どなし得べきにあらじ。否かくの如きは實に予等が偏

狹固陋として忌むところなり。

今この偏狹と固陋とを脱して、よく優等なる書に專なること

を得んとせば、まさにいかにすべきか。かのエマーソンは、實行

し得べき方法なりと稱して、左の三則を示しぬ。

まづいはく、一年を経ざる著作は讀むことなかれ。と。蓋し一

年を経てなほ社會に忘れざるものは、或は多少の趣味あるも

のならん。一年をだに經ずして、反故として投棄せらるゝもの

は、恐らくは一讀の價值なきものならん。歲月の淘汰を待たず

して、徒らに争うて新版物を讀まんは、徒勞と時間とを賭して文

學通の虚名を博し得んのみ。

又いはく、有名ならぬものは読むことなかれ。と。こは徒らに所謂珍本に蟻集することなからんことを教ふるなり。そもその名聲とは、多數の識者の鑑賞の結果にあらずや。その多數の識者の鑑賞に反して、ある機會のために纔かに散佚を免れたる如き、價値の比較的乏しき古書を殊更に熟讀せんには殆どこれ痴に類せずや。さるいかゞはしき勞力を費さんよりは、まづ有名なるものを讀みつくせ。予等の眼前には半生を讀書に費すとも、なほ熟讀玩味する能はざるべき許多の有名なる著作あるにあらずや。

又いはく、嗜好に適せざるものは読むことなかれ。と。極めて野卑なる嗜好の人を誤ることは、いづれの方面においてもわれ等の知るところなれども、前述の二條件の適合したる範圍に於

ヒル
Elyah Clarence Hill
米國人
ハーバード
大學教授

吉田兼好
鎌倉室町時代の
文學者僧侶
正平五年没
年六十九
栗栖野
山城國宇治郡
醍醐路の邊

て、その嗜好するところを求めば、蓋し大過なきを得んか。ヒルは更にこの條件を敷衍していはく、再度以上讀破することを欲せざる書は読むことなかれ。と。試に思へ、現時の讀書界がよく熟讀玩味したる新出版物、そもいくばくかある。讀者は選擇を忘れ、作者は推敲を忘れ、相率ゐて沒趣味の中に投ぜんとす。歎ぜざるべけんや。

故におもへらく、以上の三則は讀書界の時弊を救ふべき最好手段なりと。
(鶉衣評釋)

二六 徒然草抄

吉田兼好

一 神無月の頃

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎてある山里に尋ね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道を踏みわけて、心細く住みなした

る庵あり。木の葉に埋るゝ、簀のしづくならでは、つゆおとなふものなし。闕伽棚に菊紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられるよと、あはれに見る

ほどに、かなたの庭に大きな柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ少しことさめて、この木無からましかばと覺えしか。

二 雪の日の文

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがいふべき事ありて、文をやるとて、雪のこと何ともいはざりし返事に、この雪いかゝ見ると、一筆のたまはせぬ程のひがくしからん人の仰せらるゝこと聞入るべきかは、かへすく口惜しき御心なり」といひたりしこそをかしかりしか。今はなき人な



吉田兼好

れば、かばかりのことも忘れ難し。

三 よろづのこと

よろづのことは月見るにこそ慰むものなれ。ある人の、月ばかりおもしろきものはあらじ」といひしに、またひとり露こそあはれなれと争ひしこそをかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらん。

月花はさらなり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめてたけれ。「沅湘日夜東に流るゝ、愁人の爲にとゞまることしばらくもせず」といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も「山澤に遊びて魚鳥を見れば、心たのしむ」といへり。人遠く、水草清きところにさまよひありきたるばかり、心なぐさむことはあらじ。

四 高名の木のぼり

沅湘日夜
「沅湘日夜東流去、
不爲愁人住
少時。」
(三體詩、蘇叔
倫)
山澤に遊びて
「遊山澤、觀魚
鳥、心甚樂之。」
(文選)



高名の木のぼり

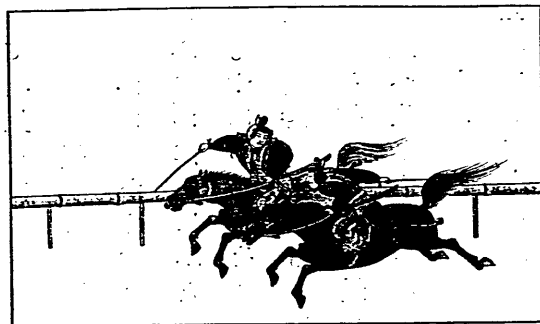
高名の木のぼりといひしをのこ人をおきてて高き木に上せて梢を切らせしにいと危く見えし程はいふこともなくて下る時に軒たけばかりになりてあやまちすな心しておりよと詞をかけ侍りしを「かばかりになりては飛びおるとも下りなん。いかにかくいふぞと申し侍りしかばその事に候。目くるめき枝危きほどはおのれが恐れ侍れば申さず。あやまちは易きところになりて必ず仕ることに候。といふ。あやしき下臈なれども聖人のいましめにかたきところを蹴いだして後易く思へば必ず落つと侍るやら

聖人のいましめ
「君子安而不危、存而不亡、治而不亂。」
（易經）

ん。

五 賀茂の競馬

五月五日賀茂の競馬を見侍りしに、



賀茂の競馬

車の前に雑人立ち隔てて見えざりしかばおのおの寄りたれど殊に人多く立ち込みて分け入りぬべきやうもなし。かゝる折にむかひなる樗の木に法師の登りて木の股につい



今の賀茂神社

賀茂の競馬
山城國葛野郡なる上鴨の社頭にて行はる

居て物見るあり。取りつきながらいたうねぶりと、落ちぬべき時に目を覺すこと度々なり。これを見る人嘲りあさみて「世の痴者」かな。かく危き枝の上にて安き心ありてねぶるらんよ」といふに、わが心にふと思ひしまゝに「われらが生死の到來たゞ今にもやあらん。それを忘れて物見て、目をくらす。愚かなることとは尙勝りたるものを」といひたれば、前なる人ども、まことにさにこそ候ひけれ。最も愚かに候といひて、皆うしろを見返りて、「此處へ入らせ給へ」とて、所をさりて、よび入れ侍りにき。かほどのことわり誰かは思ひ寄らざらんなれども、折からの思ひかけぬ心ちして胸にあたりけるにや、人木石にあらねば時にとりて物に感ずる事なきにあらず。

二七 千曲川旅情の歌

島崎藤村

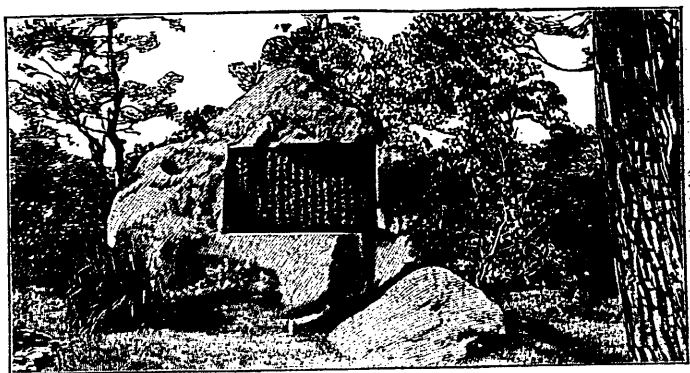
島崎藤村
名は春樹
小説家
詩人
長野縣の人

小諸
長野縣北佐久郡
小諸町

(一)

小諸なる古城のほとり、
雲白く遊子悲しむ。
緑なす葉萠は萌えず、
若草も藉くによしなし。
しろがねの衾の岡邊、
日に溶けて淡雪流る。

あたゝかき光はあれど、
野に満つる香も知らず。
浅くのみ春は霞みて、
麥の色僅かに青し。
旅人の群はいくつか



古城のほとり詩の碑

畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間は見えぬ

歌哀し佐久の草笛

千曲川いざよふ波の

岸近き宿にのぼりつ

濁酒濁れる飲みて

草枕しばし慰む

(二)

昨日またかくてありけり

今日もまたかくてありな

ん

佐久
長野縣東部の
南北佐久の地
千曲川の盆地
千曲川
長野縣東部を流
れて信濃川に注
ぐ



浅間山

この命なにを齟齬

明日をのみ思ひわづらふ

いくたびか榮枯の夢の

消残る谷に下りて

河波のいざよふ見れば

砂まじり水卷きかへる

嗚呼古城なにをか語り

岸の波何をか答ふ

過ぎし世を靜かに思へ

百年もきのふの如し



千曲川

千曲川柳霞みて、
春浅く水流れたり。
たゞひとり岩をめぐりて、
その岸に愁を繋ぐ。

(藤村詩集)

芳賀矢一

國文學者
文學博士
東京帝國大學名
譽教授
福井の人
昭和二年歿
年六十

二八 文學と氣品

芳賀矢一

文學といふものは、人間界の飾であり國家の誇であつて、個人から見れば高尚な氣品の流露である。立派な文學のある國は、その國の品格も一段と高く見え、文學の嗜がある偉人は、一しほ懐かしい心持がする。魏の曹操は其の事功の上から見ても、あまり好かれぬ人物であるが、壘を横たへて、月明かに星稀に」と歌つた一事を想ひ出すと、何となく慕はしくなつて来る。

源頼光や頼信よりも八幡太郎義家の方がえらく思はれるの

月明らかに云々
「短歌行」の中の
一句
義家の歌
吹く風もなこそ

の國と思へども
路もせに散る山
櫻かな
衣のたて云々

これに對して安
倍貞任は馬を停
めて一年を經し
絲のみだれの苦
しさに」と上句
をつけた

しひを拾ひて云
云

登るべき便なき
身は木の下にし
ひを拾ひて世を
渡るかな

弓張月の云々

時鳥名をも雲居
にあぐるかな弓
張月のいるにま
かせて

埋木の云々

埋木の花さくこ
ともなかりしに
みのなる果ぞか
なしかりける



(筆雲大村小) 關の來勿

眞似の出来ぬところ。源三位頼政の「しひを拾ひて世を渡るかなはあまり感心せぬが、弓張月のいるにまかせて埋木の花さくこともなかりしに」などの韻事があつたために、後世にまでその

かりの契を云々
とても世になが
らふべくもあら
ぬ身のかりの契
をいかで結ば
ん
波ばかり云々
有明の月もあか
しの浦風に波ば
かりこそよると
見えしか
陸奥の云々
陸奥のいはでし
のぶはえぞ知ら
ぬ書きつくして
よ變のいしじ
み

名が高くなつたのであらう。小楠公をして一層美的ならしめるのは「かりの契をいかで結ばん」の歌と「梓弓なき數に在る」の辭世とである。平忠盛に「波ばかりこそよると見えしか」の風流があつて、少の俄殿上人も優にやさしい感じを與へる。これは淨海入道の及ぶところではない。頼朝の「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ」を思へば、義經や範頼を殺すほどの人とは思はれぬ。西行法師の談話にも、幾分の風流談が混つてゐたらうと想像される。

その子實朝に至つては更に歌の名手、これは源氏の武將中の第一で、義祖八幡太郎の文學的方面は、こゝに最大な發達を遂げてゐる。頼朝の覇業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽である。

文學者の文學は當然であるが、政治家なり、武人なり、他の方面

の人で風流談のあるのは、非常にその人品を高くするもので、時にはその人の缺點まで掩ふやうな心持がする。

實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに平家の末路を飾るものは薩摩守忠度である。平家の公だちには歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落に馬を乗返して俊成卿の門をたゝいた一話は、最も麗しい永久の語草である。

武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜がなくてはならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事柄である。それであるから、戦國時代にも風流の心得のある武人が随分多かつた。承久の役に院宣を讀得る人がなかつたなどといふのは、眞の武士のなかつた證據。北條氏康・毛利元就・太田道灌などは、皆和歌風流の嗜が深かつた。豊臣秀吉を無風流な人と思ふのは大間違、吉野の花見には諸大名もまたそれ／＼詠歌をものし

てゐる。上杉謙信が霜滿軍營の一吟は、人をしてまづこれに同情せしめる所以で、その襟度の遙かに武田信玄以上だと思はしめる最大原因である。その家來の直江兼續も、文學の素養からその風采を想望せしめる。多くの傳説を集め得た源義經や、武將の典型と見られた加藤清正に風流韻事の傳はらないのは、何となくもの足らない心持がする。梶原景時、明智光秀の時にとつての連歌などが、稍その憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭である。

伴林光平
勤王家
河内の人
文治元年刑死
年五十二

幕末の志士は必ず何者かを口ずさんでゐる。藤田東湖の「回天詩」や「正氣歌」などはその尤なるもので、梅田雲濱の「妻臥病牀兒叫飢橋本景岳の誰知松柏後凋心頼三樹三郎の誰題日本古狂生」をはじめ、佐久間象山でも、吉田松陰でも、伴林光平でも、乃至は望東尼でも、或は詩に、或は歌に、その心事は永くその文學に傳はつ

望東尼
福岡の人
野村もと
勤王尼僧
慶應三年歿
年六十二

て、忘れようとしても忘れられないやうになつてゐる。これ等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人。その志を繼いだ人々が、却て明治の世には公となり、侯となり、伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一片の詩、一首の歌を留めて國難に斃れた人の方が、千秋萬古人の情緒を動かすであらう。

訂改 中 等 新 國 文 卷 六 終

K220.8

一六八

昭昭昭昭昭
 和和和和和
 九九六六六
 年年年年年
 七七十八七
 月月一一月月
 三二月月三
 十十廿廿十
 一七六二三十
 日日日日日日
 訂訂訂訂訂
 正正正正正
 三三三三三
 版版版版版
 印印印印印
 行行行行行

訂改	中等新國文	定價
		卷一、二、三、四、五、 六、七、八、九、十、 各金六拾錢

不 許	複 製
--------	--------

編者	藤村
編者	島津久基
發行者	佐藤正叟
印刷者	高橋郁

東京市牛込區拂方町二十七番地
東京市京橋區銀座座西二丁目三番地

東京市牛込區拂方町二十七番地
振替口座東京二九五〇七番

至文堂
電話牛込(34)區四四四五六番

(三協印株式會社印刷)

